



日本宣教ニュース

NO. 4 2015年4月

東京基督教大学
国際宣教センター
日本宣教リサーチ
発行人 山口 陽一

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」(コロサイ1:6)

【巻頭言】

「キリストの公同の教会に仕えて」

東京基督教大学学長 小林 高徳

世界は今日、苦難と敵意で満ちています。中東、ウクライナ、北・中央アフリカにおける戦争とテロが「日常」となっています。多くの人々が尊い命を失い、さらに多くの人々が故郷を失い、難民となっています。その中で、多くのキリスト者とその信仰のゆえに誘拐や迫害や死を経験しています。自然災害や交通手段の重大事故が頻発し、人々の痛みは消えることはありません。地には、義と平和を求める叫びに満ちています。

復活により最後の敵である死に打ち勝たれた主イエス・キリストの福音が必要とされています。十字架上で主は、人類の罪と世界の不条理のすべてをその身に引き受けられました。生ける永遠の神が死なれたのです。主イエスは、苦しむ者とともに苦しみ、泣く者とともに泣かれました。そして、不条理の極みとしての死をも経験されました。神の怒りを私達に代わって受けることで、人類の罪の赦しを成し遂げられたのです。そして主イエスは、復活により、神にある新しいいのちと万物の回復という神の救いのご計画を確かなものにされました。あらゆる不条理が神の義と平和に取って代わる確かな希望を与えるために。

歴史上、福音の宣教は、多くの困難の中で進展してきました。人の慰めを拒むような苦難を前にして、解決などありえないという絶望を前にして、キリストにあるいのちと回復の希望がことばと行動で示されてきました。世界宣教における最も未開の地のひとつである日本における宣教も、東日本大震災、超高齢化による無牧教会化、教会教職者の激減などの共通の課題に直面する中で、教派を超えた協力がなされつつあります。

「日本宣教ニュース」(No. 4)が完成しました。諸教会、各教団・教派、宣教団体、神学校、学術機関などの動向を報告しています。そこには、教会の伝統は異なっても、日本・北東アジア・グローバル化する世界にある諸教会とキリスト教諸団体が、公同の教会として、ともに祈り、仕え、神を礼拝する姿が垣間見られます。小誌を、福音宣教の進展のためにお用いいただければ幸いです。



【JMRレポート】

東日本大震災から既に4年が経ちました。3.11を迎え、各地で追悼の行事が行われる中、毎年行われているシンポジウムが今年も開催されましたので、JMRとしてのレポートを掲載いたします。

また、他宗教に関する情報を「中外日報」のオンライン情報から、一部抜粋して転載させていただきます。（記 柴田初男）

◆ 東日本大震災4周年シンポジウム ◆

「3.11震災から考える支援と宣教」

1. 日 時：2015年2月21日（土）13:30～16:00
2. 場 所：お茶の水クリスチャン・センター8F チャペル
3. パネリスト：
佐々木真輝氏（北上聖書バプテスト教会牧師、3.11岩手教会ネットワーク事務局長）
米内 宏明氏（国分寺バプテスト教会牧師、NPO 法人 Sola 代表）

＜主 催＞ 災害救援キリスト者連絡会（DRCnet）

＜後 援＞ 3.11いわて教会ネットワーク、NPO 法人 Sola、いのちのこば社、
日本福音同盟（JEA）宣教委員会・援助協力委員会、
第6回日本伝道会議実行委員会、日本ローザンヌ委員会

東日本大震災から間もなく4年。支援活動に当たってきた教会・クリスチャンと被災地域の人々との間に、新たな相互関係が築かれてきた一方、人々を教会に招き言葉によって福音を伝える、といった従来の宣教イメージからのパラダイムシフトを迫られてもいます。このような節目に、被災地支援の現場から経験や提言の声に耳を傾け、改めてこの日本で福音を伝えることの意味をご一緒に考えたいと思います。

4. 内 容：

パネリストの発言に先立ち、司会・コーディネーターの根田祥一氏から、今回のテーマ設定について、次のような話があった。

「今まで多くのクリスチャンが現地に入り支援活動がなされてきたが、そうした流れの中で、そろそろ支援活動を終息させ、もっと伝道をすべきではないか、という意見が出る一方、いやそうではなく、被災地の人の痛みに仕えることが重要であり、伝道なんて考えるべきではない、という意見も出ている。今回のシンポジウムでは、支援から宣教でも、また支援か宣教かでもなく、支援と宣教を切り離せないものとして共に考えるというテーマにした。」

◇ 【佐々木氏の発題】

- ・教会が、キリストの福音の真理をいかに輝かせるかが問題。真理を語る教会の交わりの姿や地域との関わりがどうなのか。それは、今の私たちの行いと教えとが、果してイエスのものと同じかどうか問われること。それを問い続けることが震災を免れた者としての責任ではないか。そして、①教会が何故この地域に建てられているのか。②何をなせと言われてしているのか。③何故私たちでなければならないのか、を問うことでもある。
- ・震災後4年が経とうとしているが、今まで、「境界線」を越えた働きがなされて来た。それは、①被災者と支援者との間の境界線、②教会の務めは伝道であるとし、社会的な働きを否定するような、教会が自ら描いていた働きの境界線、である。

そうした「境界線」は、①震災のような危機的な状況に遭遇した時、②隣人への愛によるわざがなされる時、根底から揺るがされる。それによって新しい意味を発見し、新たな「境界線」が再構築される。

- ・震災によって揺らぎが与えられ、隣人を愛することへ動かされていく中で、私たちが乗り越えた内なる「境界線」としては、①内陸の教会と沿岸の教会との間の境界、②支援と宣教とを分けて考える境界。共に教会に与えられた使命として考え、真理を伝えるだけでなく、真理に立った生き方をなす。その生き方を見て、被災者の方が変わっていくのを見た。③支援の働きは、支援団体の働きを教会が手助けするのではなく、キリストの救いの働きの要である地域教会が主体となって行うものとした。
- ・今後の課題としては、今は注目されているが、小さい教会同士が今後も継続して教派主義を超えた協力関係を維持し、支えあっているかであり、地域教会として地域にいかにかに仕えていくかが普遍的に問われている課題である。

◇【米内氏の発題】

- ・子供たちの学習支援を中心に、スタッフと地元の青年たちとチームを組んで活動してきた。『見上げる空』は、「被災地」から見えてきた教会の姿への気づきを記した。そのきっかけとなったのは、「ここから見える教会の姿は遠い」との青年の一言。
- ・以前、「支援から宣教へ」というクリスチャン新聞の見出しを見て違和感を覚えた。それが、支援と宣教は別ものなのかを考えるきっかけとなった。
- ・さまざまな事例を通して考えさせられた共通のテーマ

1. 私たちの福音の理解を問い直す。

- ①被災者たちの親しい者の死をどう受け止めて、彼らと接したらよいか。
線香をあげる、あげないという異教的な事柄に対し、ただ排除する姿勢の前に、その人たちの思いや死を受け止め、誠実に向き合えるクリスチャンであるかどうか、また、私たちが信じている福音とは何かが問われる。
- ②「十字架が罪人への神の徹底した寄り添い」（『十字架は寄り添い』藤木省三）であるなら、福音を持てる者、持たない者、クリスチャンかそうでない者かという上から目線で援助者と被援助者との壁を勝手に作らないような福音の理解が問われる。

2. 「教会」についての理解を問い直す。

「教会」について、外側からどう見られているのかのイメージを受け止め、自ら描くイメージやあるべき姿を問い直すこと。それは、教会形成の目的は何なのか、キリストと共に暮らすことをどう表現するか、「公共性」を問うことでもある。

- ・次のステップに進むためには、どうしたらよいか。
 - ①聖書から見る宣教の現場性と教会
「使徒の働き」を見た時、「共に生きる」「共に食べる」ことを目指した教会の姿がそこにある。現代の教会がどういう人たちと一緒に食卓を囲もうとするのかが問われる。
 - ②教会教育と子供への教育において、「学ぶ力」が重要
社会の値札が貼られていないものの価値をきちんと測れる力をクリスチャンが養い、そのような「学ぶ力」を人々に提供していくことが必要ではないか。

◇パネリスト相互の意見交換

【米内→佐々木】

- ・地域の文化の中で、イエス・キリストにあるあり方を具体的にどう示していけるか。
⇒ 教会は異教的な葬儀やお祭りを避けて来た。今後どう対応していくか学んでいく必要がある。

【佐々木→米内】

- ・地元の人が「教会をやったら」というのは何を意味しているのか。
⇒ 既存の教会を建てるようなイメージではなく、一緒に悩み、助け合える関係。日曜日の礼拝どうのこうのではなく、日常のやり取りの方が重要だということ。

他宗教に関する新聞記事から 【2014年10月～2015年3月】

◇ 現代の教化とは 宗派超え考える

全国青少年教化協議会（全青協）は「加盟教団教化部門代表者会議—現代教化法研究協議会」を新たに創設し、宗派を超えて現代に即応した布教方法を模索し始めた。各教団が布教方法などを発表し合って情報共有し、宗門の違いにこだわらない教化の理念、さらには布教プログラムや教材などの具体的な布教方法の確立を目指す。少子高齢化や過疎化などの問題が深刻化する昨今、幅広い世代に対する取り組みが求められている。

報告された以外にも超宗派の取り組みがある。近年、インターネットなど、これまでになかった手法で布教する例が目立つ。超宗派仏教徒によるインターネット寺院「彼岸寺」はさまざまなイベントを企画し、仏教を広く一般の人たちに伝える。真言宗僧侶の今城良瑞さんはネットで相談活動を行う。誰にも言えない心の傷を持つ人たちが悩みをネット上に書き込み、それに返答している。

全青協は昨年「臨床仏教公開講座」を開講し、現代の社会的な苦悩に寄り添うことのできる臨床仏教師の育成に取り組んでいる。

さらに今回の会議では、直葬や過疎などの問題にも議論が及び、各教団の取り組みや対策なども話し合われた。宗門内で社会活動の取り組みについて話し合う委員会を昨年設立した臨済宗建長寺派の長尾宏道・願成寺住職は「うちは青年会がないが、その必要性を痛感した。情報を交換できて大変、勉強になった」と話した。

激変する社会の中で表出する少子高齢化や過疎化、直葬、自死などの問題。仏教者には公益的な活動が求められる一方で、伝統的な布教方法が通用しないケースもある。今後、同会議では現代社会の求めに応じた布教教化の方法を模索していく。

（中外日報 10月3日付）

◇ 遺骨を寺に郵便で送る 広がる「送骨」

近年、遺骨を郵便で寺院に送り、合同供養墓などに納める「送骨」が急速に広がっている。

曹洞宗見性院（埼玉県熊谷市）の永代供養塔には、全国から毎月3～5柱の遺骨が郵送されてくる。6年前に行き場のない遺骨や無縁仏の受け皿となるために、料金3万円で永代供養を受け付け始めた。インターネットで広まったこともあって多くの問い合わせがあり、近郊であれば事務員が取りに行っていたが、そのうち郵送で遺骨が送付できることを知り送骨受け付けを始めた。橋本英樹住職（49）は「永代の供養をするのだから、法事は最初だけで、後はないだろうと思っていた」と振り返る。だが一周忌、三回忌をする遺族もいる。例えば、母親の遺骨を永代供養塔に祀り、十七回忌を行った30代の夫婦は「ちゃんとお墓を作ってあげたかったけれど、できなかった。せめて法事だけはしっかりさせてほしい」と語った。

さまざまな理由で遺骨が送られてくる。墓を建てる予算がない▽離縁した故人だから一緒に墓に入れられない▽墓を守る後継者がいない▽郷里の墓を維持できなくなった——など。現代社会の“縮図”だ。今や同寺の法事の半数は、永代供養に遺骨を納めた人たちのものだという。橋本住職は「どの方も真剣に遺骨の置き場に悩んでいる」と語る。

NPO法人「終の棲家なき遺骨を救う会」の竹島正理事は「遺骨を郵送するのは、不謹慎だと思われるかもしれないが、そうではない。問い合わせの多くは『しっかりと供養できますか』『本当はお墓に入れてあげたい』と悲痛なものだ」と話す。そして、「宗教心が揺らいでいる、先祖崇拝が薄らいできたということはないと感じる。多くの方は申し訳ないという気持ちを持ちつつ、その人なりのベストを尽くしている」と説明する。

一方で、現代の葬送儀礼の変化を研究する武田道生・淑徳大講師は「かつては仏壇でも移動する際には発遣の儀式をして魂を抜いた。送骨は需要があって広まっているが、やはり遺骨を物として扱っているといえる。効率を考えた現代ならではの手法だ」と苦言を呈している。

（中外日報 11月28日付）



◇ 在家から僧侶への“人生”が人気「心の拠り所に」

仏教美術展の盛況やマスコミの特集など仏教ブームが続く中、僧侶になりたいと考える人は多い。だが、在家には僧侶への道は情報不足もあり、分かりにくい。その入り口の役割を果たす「仏教塾」が人気だが、人々は何を求めて僧侶になるのか。

東京国際仏教塾は1988年、塾長の大洞龍明・浄土真宗系独立寺院光明寺住職(77)が人生の節目に仏教に基づいた人生を歩む機縁を持つことを勧める「還暦得度運動」を提唱し、設立した。これまでに約1700人が入塾、修了後に約600人が得度(在家・出家)した。多数の得度の理由は指導を縁に師僧と出会えるからだ。洞口克巳事務局長(69)は「仏教とは何か、全体を体系的に学びたい」「心の拠り所が欲しい」などが入塾の動機と語る。50代後半が平均年齢。1年間の通信教育と実践修行で、前半の仏教入門課程を修めた後、70～80%が特定の宗派を選択し、専門課程を履修する。今年の27期生は50人中35人が専門課程に進んだ。

仏教塾新設の動きもある。「御縁の会」(東京都新宿区)は2012年に発足。葬儀・法事への僧侶紹介を行い、同時に仏教塾を開設した。中根善弘代表(51)は在家の出身で建築業を営んでいた。寺院や霊園設計に携わる中で、高野山真言宗の寺と縁ができ、僧籍に入った。開設時は5人が入塾。以後も随時募集し、約6カ月で入門・専門課程を終える。修了までの費用は20万円以内、受講者に仏教の基礎知識があれば期間・費用も軽減する。修了後は希望者の得度相談を受ける。師僧を引き受ける寺院は現在20カ寺。これまで約20人が得度した。20代、30代は「人助けがしたい」と僧侶を志す人が多い。得度後に東日本大震災のボランティアに参加した若者もいる。中根氏は「世襲制の垣根もあるが、在家から僧侶になってもらうことで仏教離れをなくすことにも貢献したい」と語る。僧侶を目指す動機が、逆に現代社会で「僧とは何者か」を浮かび上がらせる。

一方で、ネットで「僧侶養成」を検索すると「僧侶資格、出家相談」受け付けをうたいつつ、

「宗教法人売買」を事業に掲げる企業なども見受けられ、一般人には判別が難しい。仏教界側から「得度」に関する情報発信も必要ではないか。(中外日報12月24日付)

◇ 寺の統廃合に悩む過疎地

総務省の将来推計によると、25年後の日本の人口は現在の84.5%にまで減少する。少子高齢化や過疎化の問題は仏教各派にとって長年の課題だが、これまで寺院の統廃合問題を表立って取り上げることはためらわれてきた。その中で、問題に直面する住職たちは相談相手を求めている。統廃合を通して、宗派と寺院、あるいは地域の関係を見直し、新たな教団の在り方を模索できないか。統廃合問題に近年、力を入れている臨済宗妙心寺派だが、その背景には約3400カ寺の宗門で、いずれこの問題に直面する可能性が高い被兼務寺院(他寺院の住職が兼務する寺院)が3分の1を占める実態がある。

同派では昨年「宗門活性化推進局」が中心になり、被兼務寺院にアンケートを実施した。その中で、兼務住職と責任役員が共に合併・解散を望む寺院が51カ寺あった。

「推進局」の久司宗浩・副局長は、寺院の統廃合について「第一に、地元の人たちの思いを尊重しなければならない」と指摘する。「住職も檀信徒も余力があるうちに統廃合を進め、スリムになりながら地域の中心的寺院をつくっていく。宗派の思いばかりを先行させるのではなく、地元の人々の思いをくみながら、それを進めていく必要がある」と強調している。

(中外日報1月30日付)

◇ 復興格差広がる宗教施設 公的支援阻む政教分離のカベ

東日本大震災から間もなく4年。被災地では復興庁や地方自治体が策定した計画に沿って復興事業が進められ、住宅再建の助成など被災者救済の様々な支援策が講じられている。しかし、寺院、神社、教会など宗教法人施設は政教分離の原則により、公的支援の対象から除外されている。そのため、約1万の被災宗教施設の本格復興は信者、檀家も被災していることもあり、ほとんど進んでいない。

復興庁が12日に発表した復興計画の進捗状況では、公共インフラは道路が99%、鉄道は91%。

医療施設は 95%、学校施設は 96%がすでに再建され、宗教施設との間の復興格差は歴然としている。

しかし、東北の地方都市や農山漁村では、社寺などの宗教施設が地域コミュニティの中核としての機能を担ってきた。村や町の復興には、これら宗教施設の復興が不可欠だ。

地域復興のため、政教分離の“壁”を超えて何とか復興への道を歩もうとしている宗教法人の姿を追った。

福島県宗教団体連絡協議会会長を務める丹治正博・福島県神社庁長（59）は以前、「震災復興と宗教」をテーマに開かれた宗教法人の公益性に関するセミナーで「原発問題で復興がなかなか進まない中、震災後、協力して慰霊と鎮魂の祈りを行い、神社やお寺が地域の絆としての役割を果たしてきたが、行政機関は政教分離を盾に被災した宗教法人の支援に前向きではない。地域社会における宗教の役割を考え、政教分離の原則の解釈のあり様によって、いくらでも支援は可能ではないだろうか」と、政教分離の原則の画一的な適用に不満を募らせた。

そして、「東北は伝統的な信仰が根強く、人口が少ないながら故郷を維持しているのは、神社とかお寺に人が集まり、絆を結ぶという機能をしっかりと果たしているから。地元根付いた小さな神社や寺院の祭りや伝統芸能こそが地域の絆を育んできたのであり、宗教施設の再興なくして真の復興はあり得ないと強く感じている」と、地域コミュニティの中心としての社寺の役割を強調した。

被災地の宗教施設の復興について、岡山大学院法務研究科の田近肇教授（憲法）は「政教分離の原則が復興格差を生じさせているという考え方を捨て、復興施策の谷間に落ち込んでしまい、なんらの支援も受けられない状況になっている宗教施設に対して、現行の制度下で何ができるかを考えることが一番大切」という。

「政教分離を緩和しろとか、宗教者が直接的に公的支援を要求すれば、国や行政側も政教分離の原則を持ち出さなければならなくなる。地域の人たちと社寺を含めた地域全体の復興計画をつくって市民の側から提案するなど、

現行の制度をうまく適用して、もっと現実的な対応を考えるべきだ」と訴える。

また、指定寄附金制度についても「宗派（包括宗教法人）がその傘下にある各宗教法人（被包括宗教法人）のために取りまとめて再建費用を募る場合の寄附金も指定寄附金の扱いに指定してもらいたい」と改善を願う。

（中外日報 2月 25 日付）

参 考 記 事

◇ インタビュー:ジャーナリスト田原総一郎(80)

テレビジャーナリズムをけん引してきた田原総一郎さんは、宗教に関心を持ち続け、伝統仏教をはじめ、新宗教、オウム真理教などさまざまな教団取材してきた。各界のトップと激しく議論する様子が戦闘的とも映る田原さんは「宗教者は人々の求めに本当に応えているか」と問い掛ける。異論も当然あるが、独自の宗教観から伝統仏教界に対して厳しい表現を用いて叱咤激励する。

○ 既成仏教にはどのようなことを感じますか。

田原 実家は浄土真宗本願寺派で、今でも年に1回は寺に行く。だが最近僕がしつこく質問や主張をするので、住職とはあまり話をしなくなった。例えば、浄土真宗は、この世の中ははかないと言い過ぎだと住職に迫る。「朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり」と説いた蓮如の御文章もあるが、人生がはかないということは重要ではない。この人生をいかに充実して生きるかが大事だと思っている。

○ 多くの人は宗教をどのように思っているかと見えていますか。

田原 若い人は宗教を面倒くさいと思っている。宗教の代わりにスピリチュアルなものにはまったり、パワースポットに行ったりしている。あれは安易な宗教だ。若者は人生に疑問があり、分からないことがいっぱいあって、そのような所へ相談に行く。場合によっては、占い師や超能力を持ったような人が答えてくれる。今のよう高度経済成長が終わり、先行き不安な時代、もっと宗教は活躍しなくてははいけない。

だが、なぜ宗教が活躍しないかということ、人々の求めにできていないから。だから、みんな

なスピリチュアルなものに流れていく。一方で、創価学会などにしても信者が減っている。何で減っているか。それは時代によって宗教に求められるものが違うからだ。創価学会が発展した時期は、貧・病・争の時代だった。みんな貧しいから励まし合って助け合う。病気になっても医者に行けないから日蓮大聖人に治してもらおうとする。そして争は嫁と姑のけんか。今は核家族になってそれもなく、誰もが医者に通うことができ、豊かになり貧もなくなった。

だが今は貧・病・争ではない悩みがある。「生きがい」のようなものだ。生きがいを求める人たちに「この世ははかない」なんて言っても全然駄目だと思う。そんなことを言ったらもう誰も寺には来なくなってしまうのでは。今の若者に浄土真宗は魅力的だろうか。若者がぜひ浄土真宗に行って話を聞きたいと、1週間でも2週間でも合宿したいと思うだろうか。

○ 宗教、宗教者のどのようなところに魅力を感じますか。

田原 いかかわしさと魅力はほとんど表裏一体。宗教もスピリチュアルもいかかわしがあるから面白い。いかかわしさがなくなったら単に道徳になってしまう。だから西本願寺や東本願寺は、言ってみればただの道徳になってしまっているのでは。

信者も魅力といかがわしさを持つから引かれる。今このような時代だからこそ、カルトの道に入る若者も多く、まさに宗教ブームだ。本当ならば、西本願寺や東本願寺はもっと活躍しなくてはいけない。道徳になってしまっているから面白くない。伝統教団にいかかわしさを感ぜないということは、魅力がないということ。はるかに新宗教の方が魅力といかがわしさを持っている。

親鸞や釈迦にもいかかわしさがあつた。今までを否定し、全く違う価値観を打ち出したわけだから、魅力と同時にいかかわしさがあつた。妻帯した親鸞はいかかわしいじゃないか。今の時代に、新しい親鸞、法然が出なくてはいけない。

○ 伝統仏教のどのようなところに問題を感じますか。

田原 伝統仏教は葬式仏教になり過ぎている。お経を上げて説法するが、僕はその話に感動したことがない。葬式は商売のようになってしまっている。商売と仏教は別だと思ふ。島田裕巳さんは葬式を無用とは言っていない。葬式仏教に堕ちた仏教を批判しているのだ。

僕は、葬式自体はあつた方が便利に違いないと思ふ。だがもっと言えば、死後なんてどうでもいい。生きている人間の悩みや苦しみや不安にどう応えるのか。その応える一つの手段として死後の世界がある。死後がメインになるなんてナンセンスだ。生きている人間が、より生きることの意味を見いだせるように、死後があると言うことはあつてもいい。今ははかないけれど浄土にいけば良くなるなんて全くのインチキだ。伝統仏教のお坊さんは生活が安定してしまつた。檀家があつて葬式があればやつていける。職業、商売として成立し過ぎているのではないか。

さらに言えば伝統教団は、今の人たちが感じている悩みや苦しみ、不安に思つていることに対してメッセージを持っていないのではないか。教団のトップは、本気で勝負しているだろうか。世の中に向けてどこまで本気になっているか。

○ 現代における宗教者の役割は。

田原 世の中は高度経済成長が終わり、難しい世の中になつた。混沌とした今だからこそ、宗教が必要だ。何を手掛かりにすればいいか、何をヒントにすればいいかをみんな求めている。どうも日本の伝統教団は、手掛かりを与えようとしていない。むしろ新宗教が手掛かりを与えようとしている。現在、寺への参詣者は増えているかもしれないが、ただの参詣者では意味がない。人生相談をしに来るような人であふれなければ。みんな悩み、不安に思つているのだから。その不安にどう答えるかが宗教の役割だと思ふ。人々は 不安、いら立ち、矛盾など多くの悩みを抱えている。そういう意味では今こそ、宗教の時代、チャンスだ。伝統仏教が頑張らなくてはいけない。

(中外日報6月25日付から一部抜粋して転載)

【文責：柴田 初男】

各新聞記事から
【2015年1月～3月】

カトリック新聞、キリスト新聞、
クリスチャン新聞

1月

◇ 南三陸 仮設住宅での餅つきークリスマスも新年もいっしょにお祝い

宮城県本吉郡南三陸町の戸倉中学校グランド仮設住宅で12月20日、餅つきが行われた。薄曇りの肌寒い中、仮設住民や地元住民、南三陸の支援活動に携わって来たクリスチャンらが集い、餅つきに汗を流した。もち米はすべて献品で、その多くはクリスチャンからのもの。参加した(株)パン・アキモトの秋元義彦社長からは、揚げパンの提供もあった。ついたお餅は鍋に入れ、仮設の庭で育てた野菜や献品されたお肉などを入れてお雑煮に。仮設の人々もクリスチャンたちも、お雑煮や揚げパンをほおぼりながら会話に花を咲かせたり、歌ったりして心を通わせた。(ク4・11日付)

◇ 子どもへの焦点、全教会で「4/14の窓」カンファレンス日本初開催

4歳から14歳の子どもの働きへの優先度を上げる国際的な宣教運動「4/14の窓」の日本初の全国カンファレンスが11月24、25日、東京・大田区の東京ライトハウス・チャーチで開かれた。「4/14の窓」に関わる海外からのゲストや、国内の児童伝道、児童ケアに関わる団体のメンバーなどが講演、データ分析、実際の取り組みの紹介、問題提起をした。子どもたちのパフォーマンスなどもあった。

最終日には、米国からハーマン・メンドーサー氏が、ニューヨークのプロミス教会で実践している子どもカルチャースクール「パワーハウス」、フィリピンからジェス・クラボ氏が、4/14の理念を伝えた。パネルディスカッションでは中野晶正氏(CS成長センター「成長」編集長)、西村敬憲氏(日本福音同盟青年委員会委員長)、山下亘氏(キッズ&ファミリーサポートミッション代表)らが報告提言。クロージ

グではMEBIG代表の内越努氏がおともだち伝道(子ども伝道)の意義を語った。

(ク4・11日付)

◇ 教皇フランシスコ 世界平和の日メッセージ 現代の奴隷制度と闘いを 搾取の悲劇に加担しないで

◇ 教皇、一般謁見で「非人道的テロ」非難

◇ 教皇ドラマの字幕版 上智卒業生らが制作

◇ 若者と共に生きて 溝部脩司教、「望洋庵」語る 京都 (カ4日付)

◇ 教皇、バチカン官僚を批判 「霊的な病氣」になりやすい

◇ 教皇フランシスコ 新枢機卿20人を任命 地理的多様性進める

◇ 司教のための社会問題研修会 福島 原発周辺で開催 事故被災者、支援者に学ぶ

(カ18日付)

◇ 街場の「祈り、背負って 宗教者がDJ「8時だヨ! 神さま仏さま」の魅力

「8時だヨ! 神さま仏さま!」—毎週水曜夜に軽快な掛け声で番組が始まる。兵庫県尼崎市のFMラジオだ。DJは住職と宮司と牧師、アシスタントは作家。異色の「超宗教」番組が注目を集めている。インターネットで同時中継し、ポッドキャストでも発信。尼崎市内だけではなく全国で聴くことができるということもあり、静かにファンを増やしてきた。最近ではネット、新聞、テレビなどに紹介され、昨年末は、取材の申し入れが相次いだ。(キ24日付)

◇ 秘密保護法施行で「牧師の会」が集会

特定秘密保護法に反対する牧師の会(朝岡勝・安海和宣共同代表)は、同法の施行を翌日に控えた12月9日、お茶の水クリスチャンセンターで、記者会見と緊急集会「抵抗の時代を迎えて、私たちはどう生きるのか」を開催した。

記者会見であいさつした朝岡氏(日本同盟基督教団徳丸町キリスト教会牧師)は、牧師だった祖父が治安維持法違反で検挙された経験に触れ、

「秘密保護法案が出された時は、頭で考えるより先に身体が拒否反応を示した」と発言。続いて呼びかけ人の中から、川上直哉(仙台キリスト教連合世話人、被災支援ネットワーク・東北ヘルプ事

務局長)、城倉啓(日本バプテスト連盟泉バプテスト教会牧師)、杉浦紀明(日本ホーリネス教団川越高階キリスト教会牧師)、星出卓也(日本長老教会西武柳沢キリスト教会牧師)の各氏が、牧師の立場から同法の廃止を訴えた。

続いて行われた緊急集会では、ノンフィクション作家の田中伸尚氏が「闇の中で光を一戦争国家化の中で」と題して講演し、約200人の参加者が耳を傾けた。田中氏は、同会に約560人の牧師が賛同していることを「決して小さくない」と評価。公務で殉職した自衛官の夫を、合祀してほしくないと言ったキリスト者の妻・中谷康子さんや、指紋押捺を拒否した在日韓国人の崔昌華牧師の闘いを通じて、「単独者」として抵抗することの意味を学んだという田中氏。抵抗の継続こそが「闇の中での光」であり、「後に続く者を信じて」決して諦めないことが重要と呼び掛けた。

講演に続き山口陽一氏(東京基督教大学教授)は、「キリスト教の信仰、神を愛し人を愛することに徹しよう」と提起し、「祈りこそが真の抵抗になる」と応答した。

集会で発表された「声明」は、「抵抗の時代を迎えている今、信仰と良心に基づく生き方を主体的に選び取っていくこと」を宣言している。

(ク4・11日、キ24日付)

◇ WCC総幹事も来日、講演 第4回 9条世界宗教者会議で

「憲法9条と世界の平和—ナショナリズムをどう超えるか」を主題とする第4回9条世界宗教者会議が12月3~5日、YMCAアジア青少年センターで開催され、世界15カ国45団体から約120人の宗教者が参加した。

3日からの本会議では、高橋哲哉氏(東京大学教授)による基調講演「右傾化する日本の歴史認識と憲法認識」に続き、WCC(世界教会協議会)総幹事のオラフ・トヴェイト氏が講演。沖縄キリスト教学院大学を休学して沖縄の現状を全国各地で訴えている知念優幸氏、ドイツ福音主義協会のフィリードヘルム・シュナイダー氏による発題が行われた。

翌4日には聖護院門跡門主の宮城泰年氏による講演、韓神大学校教授のイ・キホ氏、ミャンマーの仏教徒で福祉活動家のウ・ダマタラ氏、マレーシ

アの人権派指導者、チャンドラ・ムザファー氏による発題が行われた。

最終日に採択された共同声明は、安倍政権による憲法の再解釈に深い憂慮を示し、「地域全体を不安定にする危険な軍拡競争につながる」と懸念。「世界中のすべての人々が、狭いナショナリズムを乗り越え、憲法九条の精神にならって、戦争放棄、和解、平等、相互尊重、互恵の関係を築くよう期待」するとしている。また、具体的な行動提起として「若者にも関わってもらえるようにすること」「イスラム教徒が多数を占める国において、宗教者九条会議を主催する可能性を考慮すること」などを呼びかけた。(キ24日付)

◇ 「信徒の友」50年で感謝礼拝 姜尚中氏「ミッションに忠実に」

日本キリスト教団出版局が発行する雑誌「信徒の友」(吉岡光人編集長)が創刊50周年を迎えたことを受け、感謝礼拝と特別講演会が12月6日、日基教団富士見町教会で開催され、読者や執筆者ら約300人が出席した。

感謝礼拝の説教で同誌編集委員大宮溥氏(日本聖書協会理事長)は、創刊の経緯を紹介した上で、伝道や証しの生活など信徒に課せられてきた使命について述べ、改めて教職者だけでなく信徒自身が学び、連帯し、応答していくことの必要性和、同誌の果たしてきた意義の大きさを訴えた。

マタイによる福音書から「平和を実現する人々は、幸いである」と題して講演した姜尚中氏(聖学院大学学長)は、この50年間の歴史を概観し「対立と断裂が走り、東アジアの中にも対立がある中で、戦後70年を迎えようとしている」と、富国強兵型の国家、同質性、地域・階層間格差にさいなまれる社会への懸念を表明。緊迫する日韓関係についても、「両国の指導者は、かつての独裁者のジュニアとして相対立しながら、互いに同じようなことをしている」と指摘した。「戦後憲法とは、膨大な犠牲を払って初めて得た神の福音と、深い愛のもとに作られた憲法である」「必ずや神の福音が与えられると信じながらも、来たるべき社会がどうなるかに

ついては楽観視できない」と述べ、ドイツの社会学者M・ウェーバーの「にもかかわらず」の精神で「時代の要求に従いつつ、単に

受け入れるのではなく、日々与えられたミッションに忠実に生きよう」と呼び掛けた。

(キ24日付)

◇ 日本宣教の夜明け信じ祈る 断食祈祷聖会 2015

日本の教会の低迷、憲法を軽んじ戦争のできる国づくりを進める政治への不安、少子高齢化現象、世界で頻発するテロや戦争など社会情勢の不安、天災の急増など、私たちを取り巻く状況がますます混迷をきわめている。そのような中、今年も「年の初めに断食と祈りをもって始めよう」と、「断食祈祷聖会2015」(同実行委員会主催)が1月12日から14日まで、「日本の宣教の夜明けを信じて」をテーマに、単立・東京中央教会で開催された。聖会講師に佐藤成紀氏(フォースクエア・ホープチャペル所沢主任牧師)、藤本満氏(インマヌエル高津キリスト教会牧師)、講演講師に横山幹雄氏(となみ野聖書教会牧師)、小倉義明氏(日基教団・使徒教会代務牧師)、中川健一氏(ハーベスト・タイム・ミニストリーズ代表)が立った。

(ク25日付)

◇ アーサーさん、映画館でトークイベント 映画「神は死んだのか？」

無神論者の教授と敬虔なクリスチャンの学生が、神の存在証明を巡っての激論を描いて話題を呼ぶ映画「神は死んだのか？」が全国公開されている中、ヒューマントラストシネマ渋谷では2014年12月27日、伝道者のアーサー・ホーランドさんのスペシャルトークイベントが上映開始前に行われた。いつもの「革ジャン、スタイルで颯爽と登場。「一応、こう見えても牧師。日本でこういう格好している牧師はいません。きっと真似ても似合いません」と言って観衆を笑わせるアーサーさん。映画のタイトルについては、「馬鹿野郎、神が死ぬわけねえだろう、と言いたい」。

(ク25日付)

◇ 教皇 フィリピンを訪問 家庭守るよう呼び掛ける 台風被災者を現地で励ます

◇ 阪神淡路大震災から20年 関連各所で 追悼と祈り

◇ 「表現の自由 限度ある」 パリ新聞社襲撃事件で教皇

◇ 信徒発見150周年 特使決まる

◇ 広島教区 列聖目指しシンポ「津和野殉教者」を知る (カ25日付)

◇ WCC総幹事記者会見 オラフ・フィクセ・トヴェイト氏 “正義と平和を証しする者として、

第4回9条世界宗教者会議の開催に合わせ、12月3～10日の日程で初来日を果たした世界教会協議会(WCC)のオラフ・フィクセ・トヴェイト総幹事は12月9日、日本聖公会管区事務所(東京都新宿区)で記者会見を行い、キリスト教メディア各社の取材に応じた。ノルウェー教会(ルター派)の牧師でもある同氏は、かつて学校で、日本には戦争を禁ずる憲法があると習ったという。エキュメニズムの第一線で、世界各国のキリスト者たちと交流を続けてきた総幹事の目に、日本はどのように映ったのか。(キ31日付)

◇ 日韓カトリック自殺対策シンポ 司祭らが課題を共有「遺族にも共感を」

カリタスソウルとカリタスジャパン(幸田和生担当司教)は昨年11月29～30日、日韓カトリック自殺対策シンポジウムを東京・四ツ谷の上智大学で開催した。カトリック教会が自殺について新たな取り組みを展開しなければならないという共通認識のもと、昨年、韓国で開かれたシンポジウムに続き今年で2回目となる。

初日のプレカンファレンス「カトリック教会と自死問題」では、高木慶子氏(同大学グリーンケア研究所特任所長)が「現場から見る日本社会における自死者の現状」と題して講演。「カトリック信徒は自死に対して不安と恐怖を抱いており、教会が癒しの場になっていない」という課題を共有し、「遺族の自宅で共に慰め、祈ることで福音が伝えられるのではないかと提起した。危機感をもった仏教関係者からの講演依頼が絶えないという高木氏。「自死者、遺族を含め、どんな人にも神の無限な慈愛を強調する教会の姿を表し続けたい」と締めくくった。(キ31日付)

2月

◇ 阪神・淡路大震災から20年

6434人の命が失われた阪神・淡路大震災から20年を迎えた1月17日、神戸市では東遊園地公園にて、午前5時から追悼の集いが行われた。

5時になると、「希望の灯り」が、ロウソク、竹灯籠にともされ広場全体に広がった。地震が発生した5時46分には黙祷。続いて献花式が開かれ、大学生の弟を震災で失った福音歌手の森佑理が「しあわせ運べるように」を歌い、会場に集まった人々も声を合わせた。遺族や震災の年に生まれた新成人による言葉もあった。集いは午後5時まで開催。各地で追悼・記念の催しが開かれる。

(ク1日付)

◇ 「未来に伝えたい」神戸・賀川記念館で、震災の記憶 ジャズコンサート

「未来に伝えたいこと～1.17阪神淡路大震災20年追悼ジャズコンサート～」が、震災20年目の1月17日、神戸市中央区の賀川記念館で開かれた。

「1.17の被災体験から」として、障害者支援のNPO 法人中央むつみ会から坂井宗月さん（理事長）、林竜太さん、外国人支援のNPO 法人ソロソロ会から全美玉さん、元神戸イエス団教会副牧師の沖田康孝さん、東日本大震災被災地支援をする神戸大学発達科学部ボラバンの水坂洋介さん、新谷隼介さんが、それぞれの立場から震災を語った。「追悼ジャズコンサート」として米国・バークレー学院准教授の竹中真さんが、賛美歌や童謡を自由に力強いアレンジで演奏した。

(ク1日付)

◇ 教皇フランシスコ 貧困の元凶は 子だくさんでなく金銭崇拝の経済システム

◇ 「蟻(あり)の町のマリア」北原怜子(さとこ)さん、尊者に

◇ 受刑者ケア 課題多く 教誨師連盟、総会と研修会 東京

◇ 名古屋教区 多国籍の教会に新しい聖堂完成 刈谷教会

◇ 長崎で生まれた3修道女会が結成 祈ることで教会の柱に みつあみの会 東北被災地に会員派遣も決定

(カ1日付)

◇ 後藤健二さんのいのち守ろう 官邸前で宗教者が祈り一つに

過激派組織「イスラム国」とみられるグループに拘束されているジャーナリストの後藤健二さんの無事と解放を祈る集会在1月27日、衆議院第二議員会館で行われた。「平和をつくり出す宗教者ネット」（事務局＝日本山妙法寺内）が主催したもので、キリスト教、仏教の宗教者や国会議員など約60人が参集した。

(キ7日、ク8日付)

◇ “人間が大切にされる社会を、東京・世田谷地区でキリスト教一致祈祷会

1月18～25日は、カトリック教会と世界教会協議会(WCC)が主催する「キリスト教一致祈祷週間」。今年は「イエスは『水を飲ませてください』と言われた」（ヨハネ4・7）をテーマに、ブラジル・キリスト教会全国協議会(CONIC)が準備を行った。教皇庁キリスト教一致推進評議会とWCCが共同発行した資料に基づいて、日本では、日本キリスト教協議会(NCC)とカトリック中央協議会が日本語版の小冊子を作成。それをもとに、全国各地でエキュメニカルな集会が行われた。

東京の世田谷地区では、6教派18教会と恵泉女学園が共催する「世田谷地区キリスト教一致祈祷会」が18日、日本福音キリスト教会連合宣教教会(世田谷区祖師谷)で行われた。各教会から信徒や教職など約220人が参加した。

(キ7日付)

◇ 一人ひとりが「神の国来らせ」ビル・ジョンソン氏初来日

アジアや世界中で、聖書の語る神の国の文化を語り、『天が地に侵入するとき』など多数の著作で知られる、米国ベテル教会のビル・ジョンソン牧師が初来日し、1月8日から東京・中野区のなかのゼロ大ホールで始まった東京福音リバイバル聖会主催の集会でメッセージを務めた。テーマは「Kingdom has come! 天の御国、日本に来た!」。数時間におよぶ「天の御国を求める祈り会」、ワーシップなどを交えて繰り広げられた。

ジョンソン牧師は、「私たちは、一人ひとり、地上にあって、神の国の代表。著名な先生の偉

大な働きではなく、一人ひとり、神を示してほしい」と勧めた。(ク8日付)

◇ **父親は子どもと遊んで 教皇フランシスコ 一般謁見で語る**

◇ **中東の教会指導者 テロ資金の根絶訴える**

◇ **アウシュビッツ解放70年 カトリック教会も犠牲者追悼**

◇ **「普通の市民が加担」ホロコーストを問うシンポ 東京**

◇ **長崎 大司教、日本26聖人殉教者ミサで 先人の「堅忍」と「一貫性」たたえる** (カ8日付)

◇ **フランスの政教分離(ライシテ)における「冒涇」の意味**

「宗教への冒涇」か「表現の自由」かをめぐって議論を巻き起こしたフランスの新聞社襲撃事件。フランスでカトリックの洗礼を受け、住み始めて約40年になる竹下節子さんに、日本とは異なる歴史的文脈と事件の背景について解説してもらった。(キ14日付)

◇ **「すべての災害は『不自然』と強調 ヘイフマン教授、津波・福島災害を考察**

東日本大震災と福島第一原発事故からまもなく4年。このたび、英セント・アンドリュース大学神学部の新約聖書学教授であるスコット・ヘイフマン氏が来日し、「創造から新しい創造へイエス、審判、そして津波・福島災害」と題して青山学院大学で講演した。1月31日に同大学総合研究所が主催し、30人が出席した。

自然災害と人災について聖書的、キリスト教的視点から考えるにあたり、同氏は、ルカ福音書13:1-5を引用。これは、イエスが人間的墮落の悪と自然災害の悲劇の両方に同時に応えている箇所であり、5つの驚きがあると指摘した。

同総合研究所では、2012年度から3年間、「3・11以降の世界と聖書一言葉の回復を」というテーマで研究プロジェクトを行っており、その一環として今回の講演会が企画された。青山学院大学宗教学主任の福嶋裕子氏がプロジェクトの代表を務めている。

ヘイフマン氏は同講演のほか、東京基督教大学と東京神学大学での公開講義、また国際基督教大学教会での説教奉仕を行った。(キ14日付)

◇ **発達障害とは何か？ーキリスト教カウンセリングセミナーで原仁医師が講演**

近年、かつては「落ち着きのない子」「もの覚えの悪い子」で片づけられていた行動が、実は「発達障害」という医学的な問題であることが、知られるようになってきている。

1月31日、医師・原仁氏による講演「発達障害とは何か？」(キリスト教カウンセリングセンター主催)が行われた。会場となった東京・四谷の幼きイエス会修道院のホールには多くの聴衆が集まり、このテーマへの関心の高さがうかがえた。(ク15日付)

◇ **協働、協力で地域貢献 第4回東日本宣教ネットワーク**

被災地の岩手、宮城、福島、茨城で活動してきた牧師、宣教師、支援スタッフたちが支援活動と宣教について情報交換をし、どんな宣教課題があるかを探り、互いに祈り、協力し、励まし合うことを目的とした「東日本宣教ネットワーク」(住吉英治代表)の第4回が1月20日、宮城県仙台市青葉区の仙台バプテスト神学校で開催。南三陸支援も兼ねてファシリテーター及びコーディネーターとして活動している中澤竜生氏(聖協団・西仙台教会牧師、良き業・宣証共同体プロジェクト21現場主事)、災害支援団体「一般社団法人クラッシュ・ジャパン」設立代表のジョナサン・ウィルソン氏(グレイス・クリスチャン・フェローシップ牧師)が発題した。(ク15日付)

◇ **記念ミサに約2千人が参列 高山右近 帰天400年 来賓にフィリピンのタグレ枢機卿 神戸**

◇ **教皇 ウクライナの平和訴える「キリスト者同士の戦争はつまずき」**

◇ **教皇 ロメロ大司教の殉教を認定**

◇ **新たな取り組み報告 東北被災地の支援者集まる 仙台・元寺小路教会** (カ15日付)

◇ **「翼賛体制」危惧する言論人が声明 “どんな時勢でも権力には批判を、”**

イスラム過激派組織「ISIL」による日本人の人質事件以後、安倍政権への批判を「自粛」する空気が社会に広がっているとして、ジャーナリストや作家、映画監督など、表現活動に携わる人々が2月9日、「翼賛体制の構築に抗

する言論人、報道人、表現者の声明」を公表した。1日にインターネット上へアップした声明文には、翌日だけで2万件を超えるアクセスがあったという。

声明には、想田和弘（映画作家）、宮台真司（社会学者）、青木理（ジャーナリスト）、上野千鶴子（社会学者）、内田樹（思想家）、香山リカ（精神科医）、雁屋哲（漫画原作者）、是枝裕和（映画監督）、坂本龍一（音楽家）、中沢けい（作家）、平田オリザ（劇作家）、平野啓一郎（作家）、孫崎亨（元外交官）、森達也（映画監督）、森永卓郎（経済評論家）、吉田照美（ラジオパーソナリティ）の各氏ら約1200人が賛同者として名前を連ねた。他にNHKの現役プロデューサーや、大手新聞社、出版社の社員も賛同を表明している。（キ21日付）

◇ 東中野にキングス・ガーデン開所 交流スペース接点に地域とつながる

社会福祉法人キングス・ガーデン東京（泉田昭理事長）はこのほど、小規模多機能型居宅介護とグループホームの併設施設である「東中野キングス・ガーデン」を東京都中野区に開設した。練馬キングス・ガーデンに次ぐ都内二つ目の施設となる。3月からの入居開始を前に、2月6日に開所式が行われ、関係者約70人が出席した。

（キ21日付）

◇ NSD セミナー：若者に届くように聖書を説くー「リアルなことば」で噛み砕いて伝え続ける

「現代の若者たちに、いかに聖書の言葉を届けられるか。2012年に開催した日本青年伝道会議（NSD、日本福音同盟青年委員会主催）を継承するNSD セミナーが、2月9日に東京・千代田区のお茶の水クリスチャン・センターで開かれた。テーマは「若者に届くように聖書を説くこと」。講師の朝岡勝氏（同盟基督・徳丸町キリスト教会牧師）は「リアルなことば」を強調した。「若い人は肩書きや経歴を見ない。語り手の言葉が本物か。語り手は本気か。この人は自分が語る言葉に生きているかを見る。ごまかしがきかない」と語った。

（ク22日付）



◇ 東アジア青年キリスト者大会開催 ゆるしと平和つくり 日中韓で折り合う

日本、韓国、中国のキリスト者の若者らが国を越えて集まる「東アジア青年キリスト者大会」の第5回が、2月4日から、韓国・済州島の李基豊宣教記念館で開催された。聖書の語る神の国、和解、平和、各国の課題などを共有した。

1日目は中国のために祈った。2日目は、東アジアの宣教史と展望、対立と解決、平和つくり、などについて聖書から学ぶほか、グループタイム、餃子作りなど活動があり、最後に日本の課題を共有し、祈った。集会は7日まで続く。3日目はアウトティングとして、いまだ真相が究明されていない、1948年に済州島でおきた民間人虐殺事件「4・3事件」について学び、済州島の牧師の案内で「4・3平和祈念館」を訪ね、平和を考えた。またユネスコ世界遺産に指定されている「日出峯」を散策するなどした。

夜の礼拝では、韓国人の宣教師がメッセージし、東アジアで国を越えたコイノニア（聖霊の交わり）を作ることを励ました。最後に、韓国からの参加者を囲み、社会、教会や、北朝鮮のために祈った。（ク22日付）

◇ 教皇フランシスコ 子どもは希望のしるし 人生に活力を与え、豊かにする

◇ 教皇庁未成年保護委員会 未成年保護の規範に責任を 最大懸念は司教の報告義務

◇ 教皇、経済・食料問題で訴える 不平等が諸悪の根源

◇ 専用事務所設け活動 横浜教区の難民移住移動者委 末吉町教会

◇ 京都「InterFaith 駅伝2015」 郡山司教走る ムスリム女性にタスキ

（カ22日付）

◇ 映画「ヴァチカン美術館—天国への入口」公開 ワイン手にキリスト教論

年間500万人が訪れる「ヴァチカン美術館」を初めて3D映像化したことで話題の映画「ヴァチカン美術館—天国への入口」の公開を記念したトークイベントが2月14日、東京・下北沢の書店「B&B」で行われた。『ヴァチカンの正体』（筑摩書房）の著者である岩渕潤子氏（青山学院大学客員教授）、同志社大学卒の玉置泰紀氏（KADOKAWA ウォーカー情報局長兼関西ウォ

一カー統括編集長)に加え、キリスト新聞社の松谷信司氏が登壇し、「ヴァチカンの秘密、謎、あるある…」と題して語り合った。(キ28日付)

◇ 今年こそノーベル平和賞を―「憲法9条」実行委員会 衆議院議員会館でシンポジウム

「憲法9条にノーベル平和賞を」実行委員会は2月12日、東京・千代田区永田町の衆議院第1議員会館大会議室でシンポジウム「今年こそ ノーベル平和賞を！平和憲法を守り、活かし、広めよう」を開催。当日は石垣義昭氏(同実行委員会共同代表)、発案者の鷹巣直美氏(同実行委員会委員)ほか、弁護士の辻公雄氏、映画「日本国憲法」を製作した映画監督のジャン・ユンカーマン氏が発言。社会民主党党首の吉田忠智参議院議員、民主党の小西洋之参議院議員、日本共産党の畑野君枝衆議院議員ら国会議員もかけつけ、挨拶をした。(キ28日、ク3月1日付)

3月

◇ 各地で2・11集会 講演、セミナー、デモ行進など

2月11日の「建国記念の日」を「信教の自由を守る日」と位置づけるキリスト教界は、戦後70年を迎えた今年も、11日前後に各地で信教の自由をテーマにした集会が開かれた。特に今年は、昨年7月に集団的自衛権の行使容認が閣議決定されるなど、日本がますます戦争のできる国になっていく中での開催で、講師も参加者もますます危機感を覚えながら集い、語り、祈り合った。(ク1日付)

◇ 教皇、新枢機卿を親任「奉仕に心開く教会に」

◇ 教皇フランシスコ エジプト人犠牲者のため祈る キリスト者という理由で殺害

◇ 長崎・国宝 大浦天主堂 献堂150年祝う

◇ 日本の信徒発見の聖母 典礼式文を中央協公開

◇ 大航海時代の日欧文化交流史＝無料のオンライン講座 上智大学が3月末から (カ1日付)

◇ 「建学の精神」活かすには？ キリスト教・仏教・神道の大学が実践紹介

私立大学が「建学の精神」を形骸化させずに教育に活かしていくためには、どのような取り組みが必要であろうか。「建学の精神」を具体的な

形で教育に取り入れている宗教系の大学の実例をもとに、「建学の精神」を教育に活かす場としての「教養教育」の可能性を考えるシンポジウム「教養教育における『建学の精神』の可能性―私立大学ならではの教育の実践」が2月21日、国学院大学(東京都渋谷区)で開催された。関西学院大学(キリスト教)、大正大学(仏教)、国学院大学(神道)の3大学の実践が紹介され、寺崎昌男氏(立教学院本部調査役、東京大学名誉教授)が、大学の「独自性」について持論を述べた。大学関係者ら約150人が参加した。(キ7日付)

◇ “支援と宣教は分けられない、東日本大震災から4年を前にシンポ

東日本大震災から間もなく4年。「3.11震災から考える支援と宣教」と題するシンポジウムが2月21日、お茶の水クリスチャン・センターで開かれた(災害救援キリスト者連絡会 DRCnet 主催、3.11いわて教会ネットワーク、NPO 法人 Sola、いのちのことば社、日本福音同盟＝JEA＝宣教委員会・援助協力委員会、第6回日本伝道会議実行委員会、日本ローザンヌ委員会後援)。

パネリストに佐々木真輝(北上聖書バプテスト教会牧師、3.11いわて教会ネットワーク事務局長)、米内宏明(国分寺バプテスト教会牧師、NPO 法人 Sola 代表)の両氏を招き、被災地支援の経験から、教会と地域の間にある「境界線」をどう乗り越えるか、支援と宣教のあり方を捉え直す必要性について議論した。(キ7日、ク22日付)

◇ 戦時中獄死した詩人・尹東柱が夢見た世界―没後70年 各地で遺稿・遺品巡回展

戦後70年を迎えた今年、治安維持法の疑いで逮捕され、福岡刑務所で獄死したクリスチャン詩人・尹東柱没後70年、また死に追いやった治安維持法制定から90年になる。この節目の年、没後70年を記念する巡回展と記念集会が2月、福岡、京都、東京で開催。ゆかりの地の一つ、立教大学(東京・豊島区西池袋)では、21日から25日まで立教学院展示館で巡回展「詩人尹東柱27年の生涯」が、22日には諸聖徒礼拝堂で追悼集会「詩人尹東柱とともに2015」(共に詩人尹東柱を記念する立教の会主催)が開かれた。(ク8日付)

◇ 7つの確信で自信と平和の人生を一キム・サンボク説教集記念会

自分は長年、教会に通い、熱心に奉仕もしている。しかし、救われているという確信がない。天国に行けるかどうか分からない…。そんなクリスチャンのためにうってつけの説教集が邦訳出版された。世界福音同盟 (WEA) 前議長、ハレルヤ教会元老牧師のキム・サンボク氏による『信仰の確信をきづく七つの土台』(廉成俊編訳、ぶどうの木キリスト教会発行、いのちのことば社発売)だ。「キム・サンボク先生出版記念 来日講演」(キム・サンボク説教集の出版を祝う会主催)が2月23日、お茶の水クリスチャン・センター (OCC) で開かれた。(ク8日付)

◇ 臨時司教総会 戦後70年メッセージ発表

◇ 使徒的書簡 中央協から発行『奉献生活の年にあたって すべての奉献生活者の皆さんへ』

◇ 「福島」問題の中で奮闘 児童養護施設「堀川愛生園」職員住み込み、補充難しく 東日本大震災から4年 子どもたちに寄り添う

◇ ウクライナの教会指導者 教皇に訪問を願う

◇ 難民に厳しい冬 シリア人、高原でテント生活 レバノン (カ8日付)

◇ 「子どもと礼拝の会」10周年インタビュー 体験通して神に出会う ブラウネル・のぞみさん

教会や教会学校、幼児教育・保育の現場で子どもたちの「礼拝」を考える「子どもと礼拝の会」の活動が昨年10周年を迎えた。日基教団の牧師・信徒らが中心となり、「子どもと礼拝センター」(横浜市中区山手町66-5)で「子どもと礼拝」プログラムを実践・紹介している。教会学校の「礼拝」の部分に着目し、子どもたちが体験を通して神に出会っていくように組み立てられたプログラムだ。日基教団宣教師としてアメリカ改革派教会 (RCA) から派遣され、2007年から同会の世話人の1人として活動しているブラウネル・のぞみさん(「子どもと礼拝」認定トレーナー)に、プログラムの特徴を聞いた。(キ14日付)

◇ ルーテル神学校に「神学基礎コース」 教派超え信徒教育への貢献目指す

日本ルーテル神学校(東京都三鷹市、石居基夫校長)は、「神学基礎コース」を創設した。キリスト教入門・神学入門の基礎科目を集中し

て学ぶコースで、1年コース(1年間30単位を上限に、選択科目群から自由に選択して履修する)と、2年コース(1年間30単位を上限にした右記コースの2年連続のコース)がある。

対象は、①いずれの教会の会員でも、信徒として聖書とキリスト教、神学を深く学ぼうという意欲のある者。②キリスト教関連の施設や仕事に従事する者、あるいはそれを希望する者でキリスト教/キリスト教人間理解を深めたいという者。③将来、牧師や教会での奉仕職を考えている者。④以上のいずれでもないが、キリスト教への深い関心がある者。

入学資格は、大学を卒業した者(見込み者を含む)、もしくは、大学卒業と同程度の学力を有する者。またはキリスト教神学への理解と関心をもって熱心に学ぶ意欲を持つ者。入学試験は面接のみ。必要な書類は、①志願書、②履歴書、③成績証明(最終学歴)、④志願についての小論文(2千字程度)、⑤牧師等の推薦状(⑤は可能であれば)。

また、あらかじめ定められた神学校科目に限り、履修時申請によって科目等として登録可能。同神学校正規入学時に認定される。他の神学教育機関には履修証明を発行する。履修できる科目には、ドイツ語や美術史などの28の大学科目と、歴史神学、教義学、礼拝学など34の神学校科目がある。(キ14日付)

◇ 3.11東日本大震災記念集会:福島県キリスト教連絡会 新体制に一各地区ネットから5つの目的主導へ

東日本大震災から4周年を迎えようとしている3月3日、福島県では県内のキリスト教会合同の「3.11記念集会」(福島県キリスト教連絡会[FCC]主催)が、須賀川市堤字四戸内の須賀川シオンの丘で開催。日本福音同盟(JEA)理事長の中台孝雄氏(長老教会・西船橋キリスト教会牧師)が、ルカの福音書8章から「新しい予定に進まれるイエス」と題して説教した。また記念集会では、FCCがこの日を境に、今までの各地区の教会ネットワークの集まりから、目的主導という新しい形で進めて行くことが発表され、代表も木田恵嗣氏(ミッション東北・郡山キリスト福音教会牧師)から、船田肖二氏(イエス・キリスト・

白河栄光教会牧師)へとバトンタッチされた。
(ク15日付)

◇ **韓国で日本宣教セミナーThe One 逆転発想の地方宣教 苦しむ人の目線で道開ける**

「ひとりのための宣教プロジェクトThe One」日本宣教プロジェクトが2月26、27日、韓国・ソウル市の外国人宣教師墓苑宣教記念館で開かれた。第3回の今年は「地方宣教・逆転の発想」がテーマ。将来日本での宣教を祈り備えている若者や、韓国各地にある日本への執り成しグループなどから約150人が参加した。東日本大震災後に宮城県石巻市に移住して地域復興支援センター「お茶っこはうすオアシス」を拠点に被災者に寄り添い続けている趙泳相牧師、仏教が根強い北陸で長年開拓伝道してきた横山幹雄牧師(となみ野聖書教会)、人口比教会数が最も少ない佐賀県で無牧教会に導かれた愈華濬牧師(日本基督教団武雄教会)が現場からの証しを交えて提言。日本伝道会議「地方伝道」プロジェクト委員の根田祥一・本紙編集顧問が地方伝道の現実と課題を概説した。
(ク15日付)

◇ **大空襲の猛火を逃れて 戦後70年 司祭らとの交流で育まれた信仰「極限状態」生き抜く糧に**

◇ **移住女性に重圧 東北被災地の根強い“家制度”3団体、東京でセミナー**

◇ **教皇 利益より人を第一に 金銭は偶像になると人々を支配する**

◇ **高齢者の放置は罪 教皇 一般謁見で“尊重”呼び掛け**
(カ15日付)

◇ **3月21日に「キリスト教学校合同フェア」カトリックとプロテスタントの小・中・高37校が参加**

カトリックとプロテスタントの小学校・中学校・高等学校計37校が参加する「キリスト教学校合同フェア」が3月21日、青山学院高等部(東京都渋谷区)を会場に開催される。4回目の開催となる今年は、これまでの中学・高校に加え、小学校の個別相談ブースも設けられ、渡辺和子氏(ノートルダム清心学園理事長)の特別講演や、参加校による5分間スピーチリレーなど、受験を控える子どもや保護者に役立つプログラムが用意されている。
(キ21日付)

◇ **バハマ国の女性が式文作る 平和の実現願う「世界祈祷日」礼拝各地で**

3月6日は世界祈祷日国際委員会(WDP、本部 米ニューヨーク)が掲げる「世界祈祷日」。世界各地の教会で一つの祈りが捧げられた。

「世界祈祷日」は毎年3月の第一金曜日に、世界の国々で、キリスト者の女性たちが世界に平和が実現されることを願い、教派を超えて集い、同じ式文を用いて祈りを合わせる日。1887年に米国の女性たちによって始められ、現在はWDPが中心となり、毎年世界約170に及ぶ国で行われている。日本では日本キリスト教協議会(NCC)女性委員会により1932年より、第二次世界大戦中を除き毎年開催されている。

2015年の世界祈祷日は南米のカリブ海に浮かぶ島国、バハマ国が式文作成国となり、「バハマからのメッセージ わたしがあなたがたにしたことが分かるか」と題した式文が作成された。日本では全国61カ所で世界祈祷日の礼拝が行われた。日本聖公会三光教会(東京都品川区)で行われた礼拝には、12団体、130教会から244人が参加した。
(キ21日付)

◇ **石巻・登米・南三陸・気仙沼合同で3. 11東日本大震災追悼記念会**

震災から4年目の3月11日、「石巻・登米・南三陸・気仙沼 3. 11東日本大震災追悼記念会」(3. 11東日本大震災追悼記念会を支える会主催)が、宮城県本吉郡南三陸町の南三陸ホテル観洋で開催。石巻出身のゴスペルシンガー竹下静が賛美し、森谷正志氏(仙台バプテスト神学校校長)がショートメッセージをした。地震発生時刻が近づくと、参加者は海の見えるフロアに移動し、2時46分のサイレンに合わせ、海に向かって約1分間の黙祷。その後、峯岸浩氏(保守バプ・気仙沼第一聖書バプテスト教会牧師)が祈りを捧げた。
(ク22日付)

◇ **TCU 第4回ケアチャーチ講座開催 教会の福祉と実践を考える**

地域教会が福祉のミニストリーを行うことを応援する東京基督教大学(TCU)ケアチャーチプロジェクト推進委員会は3月7日、第4回ケアチャーチ講座「教会と福祉の実践を考える」を、千葉県印西市の東京基督教大学国際宣教センターで開催。ケーススタディでは、神奈川県横浜市都筑区

の港北ニュータウンで、介護事業、障がい者地域活動支援など、福祉で地域活動を実践しているJBBF・港北ニュータウン聖書バプテスト教会牧師の鹿毛歩氏が牧師の立場から、同教会員でNPO五つのパン理事の岩永敏朗氏が信徒の立場から講演した。(ク22日付)

◇ 自国語ミサ開始50年 教皇「神を理解し信仰を生きる助けに」

◇ 東日本大震災から4年 追悼と復興祈念 平賀司教、宮城亘理教会で

◇ 高齢者、世界に智恵を 教皇一般謁見で「大切な役割」語る

◇ 首相の靖国参拝違憲訴訟 神父も意見陳述 東京地裁

◇ 「ラルシュ」創業者にテンブルトン賞 ジャン・パニエさん (カ22日付)

◇ 神学校新卒者エキュメニズム研修会 “牧師の卵、13人「教派の垣根超え、いのち尊ぶ社会を」
神学校での学びを終え、教会に遣わされる新卒者を対象とした「神学校新卒者エキュメニズム研修会」が3月11日、キリスト教視聴覚センター(AVACO、東京都新宿区)で行われた(日本キリスト教協議会NCC 教育部主催、AVACO、日本キリスト教団出版局、日本聖書協会協賛、NCC 後援)。牧師になる前に、エキュメニズムの学びと教派を超えた出会いを体験してほしいとの願いから、毎年この時期に開催しているもの。今年はNCC加盟教派を中心に、東京バプテスト神学校、日本聖書神学校、日本ナザレン神学校、日本バプテスト神学校、日本ルーテル神学校、農村伝道神学校から13人の“牧師の卵”が参加した。(キ28日付)

◇ 「首相の靖国参拝は政教分離違反」 違憲訴訟で 神父、弁護士が意見陳述

安倍晋三首相による靖国神社参拝(2013年12月26日)は憲法の政教分離原則に反するとして、その違憲性などを訴える「安倍首相靖国参拝違憲訴訟」の第3回口頭弁論が3月9日、東京地裁で開かれた。

この裁判は、日本人と在韓の韓国人らが原告となり、昨年4月、国と首相、参拝受け入れに積極的な役割を果たした靖国神社を相手取り、参拝の違憲確認、差し止め、慰謝料1万円の支払いを求めて提訴したもの。

この日は、オーストラリア生まれのカトリック司祭、マッカーティン・ポール氏と、第二次原告として加わった中国・江蘇省の弁護士、劉恵明(リュウホイミン)氏が意見陳述を行った。(キ28日付)

◇ 第6回日本伝道会議開催地でプレ集会

2016年9月27日から30日まで、兵庫県神戸市中央区の神戸コンベンションセンターで開催される第6回日本伝道会議(JCE6)に向けての準備が加速している。開催地委員会による、JCE6に向けた最初のプレ集会として位置づけられている「第1回 KOBE クリスマンライフセミナー」(神戸神学アナログア主催)が3月14日、開催された。3つの世代層別セミナーに、参加者は熱心に耳を傾けた。教職者、信徒共に意見交換し合う場も設けられた。(ク29日付)

◇ 信徒発見150年 信仰伝える誓い 共に 歴史の舞台・天主堂で記念ミサ

◇ 教皇「世界青年の日」メッセージ キリストの教えは真の幸せへ導く

◇ いつも扉を開けて 教皇 裁く教会共同体は“残念”

◇ 長崎市の中町教会 16聖人の庭 完成

◇ 若者よ どう生きる「人間塾」のキャリア・シンポ 東京「進路選択」で鋭い質問も

(カ29日付)

(カ：カトリック新聞、キ：キリスト新聞、ク：クリスマン新聞)

【文責：柴田 初男】



各雑誌記事から 【2015年1月～3月】

1月

「百万人の福音」

◇ 特集:竹鶴リタの生涯 信仰、希望、愛を握りしめて

1. 心の拠り所—教会、2. 竹鶴家のお手伝い水田一子さん、3. 愛は悩み深い、

◇ 旬人彩人：練馬キングス・ガーデン施設長中島真樹、◇ あしあと：縁の下で日本の伝道を支えた 有賀英子、◇連載：①クリスチャン弁護士の日々思うこと、②ひきこもり院長のつれづれ日記、③侍クリスチャンのススメ、④いのちの砦、⑤ひかりの道すじ、⑥ぷんぷんのこと、一月、⑦聖書メガネで映画を見れば、⑧ブルーグレイの空の下で、⑨この町この教会：港北ニュータウン聖書バプテスト教会、⑩教会津々浦々：北海道・沖縄県

「信徒の友」

◇ 特集:扉を開く教会

1. 宣教師から見た日本の教会、2. 在外日本人宣教師からの提言：①「ただいま」と言えるコミュニティに、②教会という器にとらわれずに、3. 置かれた場所で外とつながる：①文化・信仰の違いを越えて、②ゆっくり歩くことの大切さを体感、◇特別読物：①ここに教会がある：北海道稚内教会、②追悼 思い出の三浦光世さん、③朗読演劇「塩狩峠」アンバサダーとして仕える、◇連載：①祈りの大地、②みことばにきく、③あらすじで読むキリスト教文学、④旬を楽しむスローフード、⑤聖なる光と祈りの空間、⑥シネマへの招待『エレナの惑い』、⑦山上の説教を読む、⑧がんと生きる、⑨臨床宗教師が被災地で考えたこと、⑩コーリアンの大地から、⑪神に呼ばれて、⑫アジア学院の学びで変えられた私の歩み

「福音と世界」

◇ 特集:教会とは何か——その過去・現在・未来

1. ”Being Church”への視点から見た「生き生きとした」教会、2. 「戦後七十年」と教会—バルト=ボンヘッフアーの線に立って、3. 教会における「やもめ」の存在、4. 普段の牧会の中から、5. 一人ひとりが教会、6. 日本基督教団と神学教育、7. 追悼 パネンベルク教授を送る、8. 未受洗者陪餐とドイツの教会上、◇連載：1. 「オン神学」運動が始まった、2. 現代日本の福音5、3. 佐藤優のことばの履歴書10、4. 南島キリスト教史入門3、5. 旅する教会—再洗礼派と宗教改革22

「舟の右側」

◇ 新春インタビュー：「宣教の拡大」と「宣教者の成熟」世界ウイクリフ同盟 福田崇、

◇ レポート：①教会を「謙遜」と「誠実」と「質素」へと呼び戻す 日本ローザンヌ委員会シンポジウム、②「アダム」とは誰か？

◇ 短期連載：宗教改革の精神 その2 聖書のみ、

◇ 連載：①キングダム・ミッション えと、みことばと、いえすさまと、②神様に呼ばれてどこまでも、③被造物管理の神学シリーズ その3、④旧約聖書の誤解・正解・分からない、⑤教会成長ここがポイント、⑥夫婦の癒しと回復を求めて 第1回、⑦人を育てる教育 第8回、⑨教会次世代の「事情・心情・波乱万丈」その3、⑩ジャンル別新聖書解釈入門

「HAZAH」

◇ 特集:七つの山Ⅱクリスチャンとビジネス②

1. 岸波市夫のゴールデン・ルールに従った人生、2. 日本宣教の現状とビジネスマン伝道の課題②、◇連載：1. 本文批評学の中の光と闇9、2. 創造と福音、3. 中国教会はなぜリバイバルしたのか（下）、4. ありのままでもいい？、5. 愛とロマンの地へ、6. ダビデの幕屋の回復、7. 今聖霊が教会に語っておられること9、8. 仮庵祭Ⅱ、9. 国々の民がエルサレムに集う、10. 神戸で7000カンファレンス開催、11. 海外宣教&リバイバル便り③、12. 聖徒の個人的な戦い

「福音宣教」

◇ 特別企画:神を愛し、人を愛す

1. 大切に思う思いは途絶えないー本田哲郎師に聞く

◇ 番外編:希望への物語

1. いつ被災するか、誰にも分からない、2. 私たちの社会に希望はあるか(中)

◇ 月間テーマ: 1. 愛と平和の人、マリア、
2. マリアのように生きたい、◇ 連載: ① 現在、修道生活は危機を迎えているのか、② 今なぜ「食」なのか、③ 夢とロマンのキリシタン史観、④ 食卓からのおもてなしー祈りをこめて⑬

「福音と社会 No. 277」

◇ 現地報告: 1. 教会改革に本腰入れて指令次々 教皇フランシスコの望みと願い、2. 米とキューバを関係修復へ導いた決め手は「イエスの愛」だった!、◇ カトリックアイ:<社会>改憲主義の領袖が夢見る経済繁栄は借金が元手、<教会>教会建て直しは、そこに属する貴方の責任である、◇ チャーチナウ:注目集めるバチカンの動き、◇ 読者の随想:ローマ郊外の離宮で本業に精出す”教皇庁の庭師”の杞憂、◇ 社研勉強会資料:予断を排し、歴史的経過を辿ってデータで読む「尖閣諸島の帰属」、◇ 読者の考察:発達障害者の立場から「日本版自閉症法」の福音的指針

「羊群」

◇ 今月のテーマ:罪人

1. 特別寄稿:「救いの豊かな恵み」、◇ 連載: ① 日韓の架け橋となったキリスト者たち:澤 正彦、② イエスのたとえ話:善いサマリヤ人、③ キリスト教について本当のことを知りたい:キリスト教は、いつ、どのように生まれたのか?

「あけぼの」

◇ 特集:未来につなぐ「日本人の心」

1. (対談)日本人の心の真髄に触れる、2. 思いやりとゆるし、3. かかわり「いのちの大切さ」を伝え続けて、4. 昔からの知恵をつなぎながら、5. 南相馬市の明るい未来を見つめて、6. 神庭先生のクリニック、◇ 連載: ① シネマの窓、② アジアに生きる:歴史がつまった青島の街、③ ミステリアスな日々、④ 時の岸辺にて、⑤ 活憲といのち、⑥ こどもたちと読む聖書、⑦ キリストの愛

を日本と中国に、⑧ 光と風のおくりもの、⑨ 子育て塾、⑩ チェジュ島のたより(前)

2月

「Ministry」

◇ 特集:これからの「セイジ」の話をしよう

1. 「SASPL」渋谷の中心で“愛”を叫ぶ若者たち、2. 寄稿:それぞれの“危惧”、3. 恐れを希望に!対話を始めるヒント、4. 「キボコク」座談会:ボクたちは「キボコク」で何を告白しているのか?、◇ オラフ・トヴェイト総幹事来日「あなた方がWCCだ」、◇ 人物で見る中国キリスト教、◇ 神のかたちを回復する福祉、◇ 聖☆バレンタインデー、◇ 礼拝の祈り②祈りを創る、◇ 牧師たちの日常、◇ 脚本家・市川森一さん追悼企画「ぼくらの時代のヒーローと宗教」、◇ 礼拝改革試論(2)～従来の礼拝式順の分析、◇ 葬儀礼拝～神の出来事として、◇ なぜアドミニ、どこへアドミニ、◇ インターネットで礼拝を配信しよう<受信編>、◇ 「8時だよ!神さま仏さま」の魅力

「季刊 教会」

◇ 巻頭論壇:大いなる信任

◇ QK論文: 1. 同じ場所から世界に向けて～バルメン宣言80周年記念展～、2. ジョナサン・エドワーズにおける救済の契約:内在的三位一体と経綸的三位一体の接点、3. 聖書と文学 その四 ハイジー登場人物すべての信仰の物語 その2、4. 創造への問い その11<アダムとキリスト>、

◇ QK随想: 1. 教会人として、キリスト学校法人として、2. 教会財政雑感、3. 教会とIT、4 大いなる恵み、大いなる導きに感謝して

「百万人の福音」

◇ 特集:礼拝って、なぜ行くの?

1. 色々な礼拝探訪、2. 礼拝Q&A、3. もやもや相談室、4. 教会に行けなくなった私、5. 礼拝は神との愛の交わりです、◇ 旬人彩人:ゴスペル・アーティスト 田中恵子、◇ あしあと:日本宣教60年 ラバン・ラージャス宣教

師、◇連載：①クリスチャン弁護士の日々思うこと、②ひきこもり院長のつれづれ日記、③侍クリスチャンのススめ、④いのちの砦、⑤ひかりの道すじ、⑥ふんぷんのこと、二月、⑦聖書メガネで映画を見れば、⑧ブルーグレイの空の下で、⑨この町この教会：宇都宮聖書バプテスト教会、⑩教会津々浦々：北海道・鹿児島県

「信徒の友」

◇特集：招聘とは何か

1. なぜ今、「招聘」を学び直すのか、2. 失敗しない招聘のために、3. 『赤毛のアン』理想の牧師像を語る、4. 招く教会の側からの視点、◇特別読物：①孤独死から考える現代社会の前途、②証言 原発という差別、◇連載：①祈りの大地、②みことばにきく、③山上の説教を読む、④旬を楽しむスローフード、⑤聖なる光と祈りの空間、⑥シネマへの招待『サン・オブ・ゴッド』、⑦あらすじで読むキリスト教文学、⑧がんと生きる、⑨臨床宗教師が被災地で考えたこと、⑩コーリヤンの大地から、⑪神に呼ばれて、⑫野宿する人と共に囲む主の食卓

「福音と世界」

◇特集：教会と預言

1. 危機の時代のエクレシア、2. 矢内原忠雄に学ぶ現代の預言者像、3. 旧約預言者の特質と現代、4. 一斉に讃美の声を挙げる女性預言者たち、5. 預言者的精神を受け継ぐということ、6. 未受洗者陪餐とドイツの教会 下、◇連載：1. ドイツ教会通信1、2. 中国教会通信7、3. 現代日本の福音6、4. 佐藤優のことばの履歴書11、5. 南島キリスト教史入門4、6. 旅する教会ー再洗礼派と宗教改革23

「舟の右側」

◇インタビュー：神様と世の間の「架け橋」となる、◇メッセージ：神の祝福はすべての国民のため、◇シリーズ キングダム・ミッション：教会と連携し、地域に神の国を、◇連載：1. 神様に呼ばれてどこまでも、2. 宗教改革の精神 その3 信徒皆祭司、3. 被造物管理の神学シリーズ その4、4. 旧約聖書の誤解・正解・分からない、5. 教会成長ここがポイント、6. 夫婦の癒しと回復を求めて、7. 教会次世代の「事情・心情・波乱万丈」、8. ジャンル別新聖書解釈入門

「HAZAH」

◇特集：七つの山Ⅱクリスチャンとビジネス③

1. クリスチャンは皆、宣教師！ファーディ・カタバイ師を知る、2. 神の国を第一とするビジネス、◇連載：1. 本文批評学の中の光と闇10、2. 創造と福音、3. 「イエス様のド根性」、4. ダビデの幕屋の回復、5. 今聖霊が教会に語っておられること10、6. 仮庵祭Ⅲ、7. 国々の民がエルサレムに集う、8. 天の御国の鍵とアジアン・ハイウェイ、9. 海外宣教&リバイバル便り④、10. 一時間で、すべてが変わる

「福音宣教」

◇特別企画：対談 神を愛し、人を愛す①

1. 成長よりも分配を

◇番外編：希望への物語

1. 私たちの社会に希望はあるか（下）

◇月間テーマ：メタノイア

1. 「人とは何ものか（詩編8）」、2. ライフスタイルの転換とエコロジー、3. 私の生き方と原発、◇連載：①クリスチャン・ライフ・コミュニティ（CLC）、②今なぜ「食」なのかその2、③キリシタンはどのようにして生まれたのか、④食卓からのおもてなしー祈りをこめて⑬

「羊群」

◇今月のテーマ：人生観

1. 特別寄稿：「使命に生きる」、◇連載：①日韓の架け橋となったキリスト者たち：吉田耕三、②イエスのたとえ話：牧者と門のたとえ、③キリスト教について本当のことを知りたい：キリストは自分で自分を救えなかったのか？

「礼拝と音楽」

◇特集：若い世代とともにつくる礼拝

1. すべての民は主を讃美せよー若い世代とともにつくる礼拝、2. Reachingoutーホープカレッジのチャレンジ、3. スクリーンと式文のはざままで、4. 若者も共に与る礼拝、5. 若者と讃美、6. 持ち寄ること・分かち合うこと

「あけぼの」

◇ 特集:迷走する「平和」

1. (対談)平和への一步、2. 希望を捨てずに跳ね返そう、3. 芽を出した“非暴力の種”は---?、4. 『ちいさなへいたい』を訳して、5. 北の大地から平和憲法を広めたい、6. 神庭先生のクリニック、◇連載:①シネマの窓、②アジアに生きる、③ミステリアスな日々、④時の岸辺にて、⑤活憲といのち、⑥こどもたちと読む聖書、⑦キリストの愛を日本と中国に、⑧光と風のおくりもの、⑨子育て塾、⑩チェジュ島のたより(前)

3月

「百万人の福音」

◇ 特集:宮城とキリスト教

1. 漁村支援、2. 甲状腺検診、3. 仮設住宅支援、4. ここで生きていく、5. 宮城宣教史、◇旬人彩人:大衆中華「ホサナ」店主 岩崎 潔、◇あしあと:小田原短期大学准教授 村田紋子、◇連載:①クリスチャン弁護士の日々思うこと、②ひきこもり院長のつれづれ日記、③侍クリスチャンのススメ、④いのちの砦、⑤ひかりの道すじ、⑥ぷんぷんのこと、三月、⑦聖書メガネで映画を見れば、⑧ブルーグレイの空の下で、⑨この町この教会:古川聖書バプテスマ教会、⑩教会津々浦々:岩手県・愛媛県

「信徒の友」

◇ 特集:受難節 イエスの十字架と私の苦難

1. 苦難から隣人愛へ、2. 苦しみとの向き合い方、3. 亡き娘が出会わせてくれた隣人、◇特別読物:日本基督教団 教会中高生・青年大会 日独・日米 ユースミッション2014、◇連載:①祈りの大地、②みことばにきく、③山上の説教を読む、④旬を楽しむスローフード、⑤聖なる光と祈りの空間、⑥シネマへの招待『悼む人』、⑦山上の説教を読む、⑧あらすじで読むキリスト教文学、⑨がんと生きる、⑩臨床宗教師が被災地で考えたこと、⑪コーリヤンの大地から、⑫神に呼ばれて、⑬IN Society:ハンセン病差別と教会・信仰

「福音と世界」

◇ 特集:教会と終活

1. 死を生きるコイノーニア、2. 死に対する自由意志の限界、3. 与えられたいのちと向き合うキリスト者の「終活」、4. 今を一生懸命生きるキリスト者として死ぬこと、生きること、5. 「良き管理人」となるために、6. 敵を愛するとは何か、7. リミナリティの創造的可能性、◇連載:1. 韓国教会通信8、2. カナダ教会通信2、3. 現代日本の福音7、4. 佐藤優のことばの履歴書12、5. 南島キリスト教史入門5、6. 旅する教会—再洗礼派と宗教改革24(最終回)

「舟の右側」

◇インタビュー:帰還するユダヤ人に神の愛と食糧を届ける、◇特集:聖書から世界と日本を視る:1. イスラム国・ヨルダン・聖書預言、2. 神への輝く信仰を記した獄中書簡、3. 日本の戦後70年を、とりなし祈る、◇連載:1. 被造物管理の神学シリーズ その5、2. 旧約聖書の誤解・正解・分からない、3. 教会成長ここがポイント、4. 夫婦の癒しと回復を求めて、5. 人を育てる教育、6. 教会次世代の「事情・心情・波乱万丈」、7. ジャンル別新聖書解釈入門

「HAZAH」

◇ 特集:ビル・ジョンソン聖会

1. 神の国が日本に侵入する時、2. ビル・ジョンソン東京大会、◇連載:1. 創造と福音、2. 本文批評学の中の光と闇11、3. 死んだが、語り続けている、4. 愛とロマンの地へ、5. 今聖霊が教会に語っておられること11、6. 仮庵の祭りIV、7. 福岡と沖縄のプレ・ギャザリング、8. 海外宣教&リバイバル便り⑤、9. 震える杯

「福音宣教」

◇ 特別企画:対談 神を愛し、人を愛す②

1. 経済が見えてくると聖書が分かってきた、◇番外編:希望への物語
1. 大震災に宗教や科学、芸術はどのように反応したか(上)、◇フォーラム:1. 聖体拝領の方法に関する司教団の指針を受けて、2.

追悼 ヨゼフ・ピタウ大司教、3. 「ありがとう」の人生を想う、◇月間テーマ：洗礼

1. 「希望」へと生まれ変わるー初代教会におけるバプテスマの意味、2. 洗礼を語る言葉、

◇連載：①宣教会セルヴィ・エヴァンジェリー、②力信仰の時代、③潜伏時代のキリシタン信仰、④食卓からのおもてなしー祈りをこめて⑭

「羊群」

◇ 特別寄稿：「神の言葉を聞き、造り変えられる歩み」

◇ 連載：1. アルコイリスからの便り、2. 性について本当のことを知りたい、3. イエスのたとえ話

「あけぼの」

◇ 特集：家族を拓くーめざそう脱“子どもの貧困”

1. (対談)子どもと親を支えていく社会に、2. 「かがやき」、3. 学びの機会を平等に、4. 「貧困」から見いだす活路、5. 神庭先生のクリニック：子どもの貧困、◇連載：1. アジアに生きる、2. ミステリアスな日々、3. 時の岸辺にて、4. 活憲といのち、5. キリストの愛を日本と中国に、6. 子育て塾、7. 特別寄稿：男性性の時代から女性性の時代へ



各教団・教派、宣教団体の 機関紙・ニュースから

1月

「教団新報 NO. 4813 1/24」

(日本基督教団)

1. 新春メッセージ、2. 三役の抱負・祈り、3. 東日本大震災 被災地のクリスマス、4. 教師委員会：福島・被災教会を問安、5. 常議員(信徒)プロフィール

「聖公会新聞 NO. 713 1/25」

(日本聖公会)

1. 阪神・淡路大震災から20年、2. 各教区だより：京都、中部、大阪、九州、沖縄、北海道、東北、横浜、3. ローマ・カトリックと聖公会の国際対話について(下)

「キリスト教学校教育 NO. 680 1/15」

(キリスト教学校教育同盟)

◇ キリスト教学校教育懇談会第12回講演会：キリスト教教育と道徳教育、◇ 第56回学校代表者協議会：主題「キリスト教主義学校におけるキリスト教教育の存続の危機に関して」、1. 講演：いのちをいとおしむ心を育むとは、2. 発題：①「道徳の教科化」に教育同盟はどのように対応するのか?、②キリスト教学校における事務職員に関する事務局長・事務長連絡会議の設置の提案について、③キリスト教学校の連帯の新たな可能性について、3. 第9回全国聖書科研究集会：レポート「青山学院のキリスト教教育」、4. キリスト教Q&A：「受肉」とは

「世の光 NO. 772」(日本同盟基督教団)

1. 教会支援部：恵みに満たされた中津キャンパン、2. 教会紹介：播磨キリスト教会、鳥取聖書教会、3. 救いの証し：父なる神に守られて、4. 献身の証し：弱さのうちに、◇宣教会：神奈川伊豆宣教会、5. 信仰告白：教団信仰告白の解説その⑦、6. 信望愛：児童発達支援放課後等デイサービス「ジョイジョイ」、◇ 国内宣教 NO. 175、1. 兄弟愛による複数宣

教区レベル開拓、2. 受けた支援、そして宣教
献金に加わる感謝と喜び：塩尻聖書教会、3.
世界宣教大会分科会＜子ども伝道＞報告、4.
教団レベル開拓教会 新年の抱負、5. 東北宣
教プロジェクト NEWS No.1、◇ 国外宣教
No.455、1. 元宣教師の経験知を生かす、2.
日本語集会での出会い、3. マイワ語聖書翻訳、
4. キャンプ場の奉仕、5. 宣教師近況・祈祷
課題、ティーンエイジャーの救い（ブラジル）

「JHC Revival 795号」 （日本ホーリネス教団）

1. 次世代育成－育つ喜び、育てる喜び－四国教
区編②、2. 特集 新春メッセージ：①私の最後の
使命 80歳を迎えて、②弟子となり、弟子を育て
る、③願わされていることの土台、3. 宣教局ニ
ュース：①国内宣教「一緒に奉仕、楽しかった」、
②国外宣教：なぜ宣教師になったの？、4. 日韓
国交正常化50周年：福音による和解委員会、5.
東京聖書学院PR：『20代で入学・卒業した恵み
の証』、6. 私のおすすめ この一冊、7. 教育
局だより：①「CSネットワーク委員会報告」、
②「第8回全国信徒大会・ちば大会報告」、③
「信徒代議員研修懇談会報告」、8. ネヘミヤ・
プロジェクト報告：ネヘミヤ・プロジェクトでリ
バイブ！、9. 教団本部ニュース

「イムヌエル教報 NO.822」 （イムヌエル総合伝道団）

1. 2015年 創立70周年の年 明けましておめで
とうございます、2. 選挙管理委員会 代表選出
選挙公報、3. 第1回 YSB リトリート 置かれた
環境を知る、4. 海外トピックス、5. 国内教会
局から「建上げ」をみざして、6. 教団創立70
周年 青年大会に向けて 青年からの提言 その
2：課題を見据えるために アンケートの結果か
ら現状を読む、6. 世界宣教局：台湾、フィリ
ピン、ザンビア、カンボジア、11. 聖宣神学院報、
12. 公報・消息

「JCCJtimes NO.746」

（日本イエス・キリスト教団 時報）

1. 教区だより：①北海道地区、②信越教区、
③京都教区、④大阪教区、⑤兵庫教区、2. 公
報・消息

「アッセンブリー News NO.712」

（日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団）

1. 教団総会報告、2. 2015年度教団人事、
3. イスラエル公認ガイドが教える穴場スポッ
ト④アルベル山、4. 新・祈りのコラム⑨、
5. 教区情報 vol.1 東北教区

2月

「教団新報 NO.4814 2/7」

（日本基督教団）

1. 在日韓国朝鮮人連帯特設委員会：ヘイ
ト・スピーチ「国際会議」開催を計画、2.
第4回九条世界宗教者懷疑：「九条世界宗教者
会議」と改名し開催、3. 第39回教団総会：
主な総会議事結果、4. 東日本大震災被災地
冬のプログラム、5. 伝道のともしび、6.
2・11メッセージ

「教団新報 NO.4815 2/21」

（日本基督教団）

1. 第38総会期教師検定委員会：15年春季試
験、信濃町教会を会場に、2. 会館問題特別
委員会：概算目論見、2億7千万円の内容確認、
3. 宗教改革500周年記念事業準備委員会：伝
道のため伝統の確認と広く教会の一致を、4.
「兵庫県南部大地震記念の日」追悼礼拝：震災
20年で区切ることなく、5. シリアで拘束さ
れている日本人の開放とシリアの平和のため
に祈る会、6. カルト問題対策研修会、7.
宣教師からの声（番外編）

「聖公会新聞 NO.714 2/25」

（日本聖公会）

1. 2教区で聖職按手、新司祭と新執事誕生、
2. 各教区だより：東京、京都、中部、大阪、
九州、北海道、東北、横浜、3. 原発問題に
ついてのQ&A改訂第3刷の活用を

「世の光 NO. 773」 (日本同盟基督教団)

1. 宣教区：信州宣教区、2. 教会紹介：波崎キリスト教会、墨田教会、西大寺キリスト教会、3. 献身の証し、4. 信仰告白：教団信仰告白の解説その⑧、5. 信望愛：主の恵みの年、6. 恵流：災禍の世とキリスト者、◇ 社会厚生部だより 第57号：①互いに祈る絆を、②心と体をよく保つために(40号)、③いっせい防災訓練の感謝と報告、④謝恩デー献金のご報告、◇ 国外宣教 NO. 456：①地域社会のグローバル化、②モンゴル教団派遣宣教師、ブラジル教団派遣宣教師、③宣教師近況・祈祷課題

「イムヌエル教報 NO. 823」

(イムヌエル総合伝道団)

1. 教会総会を越えて 2015年のキックオフ、2. 追憶：故松村千恵子先生、3. 関東4教区合同新年聖会：弱さに中にある恵み、4. 国内教会局から、5. 教団創立70周年 青年大会に向けて 青年からの提言 その3、6. 公報、◇ 広げた翼：世界宣教局、1. ポリビア、2. ザンビア、3. フィリピン、4. 台湾、◇ 聖宣神学院報、1. 神学エッセー IGMの神学的遺産の再確認、2. 信念を迎えて・今年の抱負

「JHC Revival 796号」

(日本ホーリネス教団)

1. 次世代育成ー育つ喜び、育てる喜びー近畿教区編①、2. 東京聖書学院PR：家族寮の恵みの証し、3. 特集 第8回全国信徒大会報告、4. 次世代育成プロジェクト報告：①公開講座報告、②九州教区次世代育成プロジェクト「夫婦の学び」報告、③第1回 出会いのパーティ報告、5. 宣教局ニュース：①国外宣教、6. 教団本部ニュース

「JCCJtimes NO. 747」

(日本イエス・キリスト教団 時報)

1. 教区だより ①東北教区：壮年部交わり会、②関東教区：ジュニア部新年会、③大阪教区：新年聖会、④兵庫教区：信徒大会、2. 公報・消息

「アッセンブリー News NO. 713」

(日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団)

1. 教団の動き (55)、2. 紹介 少年伝道部、3. 中央聖書神学校 (CBC) 掲示板、4. 理事長便り、5. 第40回 全国聖会ニュース2、6. 報告 広島大規模土砂災害、7. 広島大規模土砂災害支援レポート、8. 新・祈りのコラム7、9. 教区情報 Vol.2：関東北東教区

「協力 NO. 83」

(伝道団体連絡協議会)

1. 伝道団体連絡協議会 新年会報告、2. 伝道団協 加盟団体の紹介：①日本CGNTV、②日本宣教リサーチ、3. 伝道団協 加盟団体の近況・祈りの課題

3月

「教団新報 NO. 4816 3/7」

(日本基督教団)

1. 第39総会期 第2回(臨時) 常議員会：伝道資金交付、会館工事費支出を決定、2. 教団将来構想検討委員会：10年先の教団のグランドデザインを、3. 教育委員会、4. 年金局理事会、5. 予算決算委員会、6. 伝道資金小委員会、7. 部落開放センター運営委員会、8. 宣教師からの声 (番外編)

「教団新報 NO. 4817 3/21」

(日本基督教団)

1. 第133回神奈川教区総会、2. 社会委員会、3. 教師養成制度検討委員会、4. 伝道委員会、5. 伝道推進室、6. 宣教師からの声 (番外編)

「聖公会新聞 NO. 715 3/25」

(日本聖公会)

1. 3月11日午後2時46分を心に刻む、2. 各教区だより：北関東、京都、中部、大阪、神戸、北海道、横浜、3. 尹東柱の詩を通して考える平和の意味

「キリスト教学校教育 NO. 681 3/15」

(キリスト教学校教育同盟)

1. 2014年度教研中央委員会、2. 加盟校アンケート集計「キリスト教活動について」、
3. キリスト教教育者物語⑳、㉑、㉒、㉓、
4. 韓国基督教学校聯盟第52回総会

「世の光 NO. 774」

(日本同盟基督教団)

1. 「教会と国家」委員会：2015年2・11信教の自由セミナー、2. 宣教区：新潟山形宣教区、
3. 教会支援部：教会支援制度を利用させていただいて、4. 献身の証し：宣べ伝える人がいなければ、5. 信望愛：十字架とハッピー、6. 教団ニュース、◇ 国内宣教：1. 教会の自立途上にあるものとして、2. 宣教区レベル開拓教会、3. 東北宣教プロジェクト NEWS NO.2、◇ 国外宣教 NO457：1. 国外宣教委員会の働き、2. 台湾、3. パプアニューギニア、4. 宣教師近況・祈祷課題、5. 2015浜名湖バイブルキャンプ青年キャンプ、6. 2015松原湖バイブルキャンプ

「イムマヌエル教報 NO. 824」

(イムマヌエル綜合伝道団)

1. 第20次教団総会報告、新教団運営委員の抱負、代表就任挨拶、総会任命教団運営委員会／常置委員会、2. 故山本剛先生、故西村喜和先生追憶、
3. 教団創立70周年 青年大会に向けて 青年からの提言 最終回、4. 公報、◇ 広げた翼：世界宣教局、1. 香港、2. 台湾、3. ザンビア、4. ケニア・テヌウェク、◇ 聖宣神学院報：
 1. 神学エッセー IGMの神学的遺産の再確認、
 2. 信徒公開講座に参加して、
 3. 私の神学生時代、
 4. 同窓生の近況、
 5. 神学院スタッフ－恵みの想起、
 6. 学苑だより

「JHC Revival 797号」

(日本ホーリネス教団)

1. 次世代育成－育つ喜び、育てる喜び－近畿教区編②、2. 2014年度全国新年聖会報告「福音の喜びに生きるホーリネス」、3. 教育局だより：正教師志願者研修会報告、4. 宣教局ニュース（国内宣教、国外宣教）、5. 新会堂報告：北日本ブロック奥羽教区 長井教会、6. 東京聖書学院PR 信徒コースのご案内、7. 追悼火物喜

代枝師を御国に送って、8. 戦後70年日本を執り成す、9. 教団本部ニュース

「JCCJtimes NO. 748」

(日本イエス・キリスト教団 時報)

1. 教区総会報告（前篇）：①関東教区、②信越教区、③京都教区、④大阪教区、⑤四国教区、2. 神学生修養会、3. 日本宣教の恵み、4. 公報・消息、

「アッセンブリー News NO. 714」

(日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団)

1. 教団の動き（56）、2. 市川俊一師引退について、3. 海外ニュース：台湾AG教団の歴史、4. 震災特集：3.11大震災から4年、5. 中央聖書神学校（CBC）掲示板、6. 女池先生の召天、7. 特集：祝・CAの日（1月12日）、8. 新・祈りのコラム11、9. 教区情報 Vol.2：関東南西教区

Japan Harvest Volume 66 No.1

(Japan Evangelical Missionary Association)

◇ 特集 I Member Missions (団体の自己紹介)

1. Japan Campus Crusade for Christ (ジャパン キャンパス クルセード)
2. New Life Ministries (ニューライフ ミニストリーズ)
3. North American Baptist Mission in Japan (在日本北米バプテストミッション)
4. Norwegian Lutheran Mission (ノルウェー・ルーテル伝道会)
5. SEND (SEND 国際宣教団)

◇ 特集 II World View (世界観)

1. Clothed and Ready (身支度して備える)
2. Warukuchi (悪口)
3. Japanese Relational Glue (日本人の関係の接着剤)
4. Biblical Response to Warukuchi (悪口への聖書的な反応)
5. The Shadow of Confucius (孔子の影)
6. Truth and Sharing the Gospel with Japanese (日本人と福音を分かち合うことそして真理)

【和訳：花菌 征夫】

キリスト教大学・神学校のニュースから

1月

「茨城キリスト教大学 みどりの 第73号」

1. 生活科学部：開設15周年記念行事を終え、
2. 児童教育学科主催講演会報告：「子どもの貧困と教育」、
3. キアラ館：寄贈パイプオルガンの設置をめぐる、
4. 川瀬巴水展と林望氏講演会、
5. キリスト教センター便り、
6. 「ひたち学・経営学部経営フォーラム2014」開催について、
7. 国際理解センターから

「神戸改革派神学校 公報 No. 78」

1. 「オランダで学んで」、
2. 夏期伝道報告、
3. 編入生挨拶、
4. 職員紹介、
5. 福音主義神学会参加報告、
6. 2015年神学校主要行事予定

2月

「大阪キリスト教短期大学学院報 第82号」

1. 幼児教育学科：一人ひとりが自分らしさを発揮できるように、
2. 国際教養学科：「国際教養学科通信 2014 WINTER」、
3. 神学教育：神の栄光を顕す学院、
4. 幼稚園・保育園、
5. 卒業生友の会だより

3月

「聖書宣教会通信 160号」

1. 聖書神学舎から、
2. 主のあかし、歌のことば、
3. 2015年度 聖書宣教会講座案内、
4. 2015年度 聖書宣教会主要年鑑予定

「東京聖書学院 学院だより 35号」

1. 卒業論文要旨・卒業の証、
2. イスラエル研修旅行、
3. フライデーナイト、
4. 役員（新）を紹介します

各学術雑誌の記事から

「福音主義神学 第45号」

(日本福音主義神学会・2014.12)

◇ 福音主義神学、その行くべき方向 (1)

- [論文] 1. 福音主義神学における聖書釈義、
2. 新約聖書における使徒的解釈学—現代福音主義への示唆—、
 3. 「『パウロ研究』を巡る新しい視点」を巡って—契約遵法主義を中心にして—、
 4. 震災後の日本における福音主義神学の教理的問題、
 5. 「福音主義イスラエル論」—神学的・社会的支店からの一考察、
 6. Evangelicals と Fundamentalist の用語における歴史的考察

「基督教研究 第76巻 第2号」

(同志社大学神学部基督教研究会・2014.12)

- [論文] 1. 北森嘉蔵のシュライアマハー理解、
2. 「聖霊」の系譜、
 3. ヒップホップの宗教的機能：ヒップホップ世代の救済観、
 4. ハルナックとレオ・ベック

「聖学院大学総合研究所紀要 NO. 58」

(2014.11)

「第三回東日本大震災国際神学シンポジウム」報告

◇ 主題講演 (第一日目 2月15日) : イエスのしたように苦しみ、また仕える—災害後の意味形成について、

◇ パネルディスカッション：「震災へのかかわりと震災の語り」

1. 関係論に立つ福祉実践、
 2. カリタスのアニメーション活動、
 3. 福音の包括的なミニストリー、
 4. 日本バプテスト連盟と東日本大震災、
- ◇ 分科会1：心理カウンセリング的配慮

1. 新しい物語と儀式をつくる、
 2. 心と魂のストレスケア、
- ◇ 分科会2：支援と宣教(宣証)
1. 救援と救済のジレンマ、
 2. 宮城宣教ネットワーク、
- ◇ 分科会3：死者儀礼・伝統習俗とどう向き合うか
1. 死者儀礼・伝統習俗とどう向き合うか、
- ◇ 分科会4：原発と震災
1. 「逃げたいのに逃げられない」現実と、どう向き合うか、

- ◇ 分科会 5：在留外国人と震災 1. “見えなくされている人びと”－在日外国人被災者、◇ 分科会 6：次期災害に備える 1. 地域教会防災ネットワークづくり、2. 災害対応チャプレン、◇ 全体会 1. 災害が教会に教えること、◇ 主題講演（第二日目 2月17日）：「あなたは誰の足を洗うのか」－苦難のただ中でリーダーを起こす、◇ テーブルディスカッション発題 1. 土の器／キリストという宝、2. スローワーク、2. キリスト者学生として地域社会で福音に生きる

「旧約学研究 第11号」
(日本旧約学会・2014.11)

- [論文] 1. nun paragogicum の比較検討に基づくマソラのモーセ五書部分とサマリア五書の需要聖書の探求、2. 預言者エゼキエルの祭司性－「再活性化運動」の視点から－、◇ シンポジウム「神義論」発題：1. ヘブライ語聖書における「神の義」～その表現と機能～、2. 神義論から脱・神義論へ、3. タナッハ耕三とヨブ記の特殊性：神義論をめぐる哲学と聖書理解の対話のために（要点）

「人間学紀要 第44号」
(上智人間学会・2015.1)

- ◇ 学術大会基調講演：共生とアイデンティティ－折り合いをつけるということ、[研究論文] 1. ブルトマンにおけるケリュグマと祭儀、2. 文学は「共生」をどう捉えるか－遠藤の『女の一生』の場合、3. アニメの「風立ちぬ」について、[研究ノート] 1. 西田の場所論を基軸とした東西宗教邂逅の道～21世紀に相応しい人類共通のたましいの元型～

「紀要 第47号」

(明治学院大学キリスト教研究所・2015.1)

- ◇ 論文：1. 丸山真男における宗教的実存のゆくえ(1)、2. 浦上潜伏キリシタンの信仰－没収・伝来書物の検討を手掛かりにして、3. 植村正久の武士道論序説－1984年～1992年を対象に－、4. 『宇宙の目的』再考(1)－賀川豊彦と自然神学－、5. モンドラゴンにおける「意識革命」－利己心を超えられるか－、6. To Build a New Japan、7. 戦いを超えて－宣教師 Andrew

- N. Nelson の生涯と働き－、8. 志喜屋孝信のキリスト教－戦後復興と新沖縄建設運動との関連で－、9. 「竹のカーテン」を越えて－日本キリスト教代表による中国問安使節団(1957年)の背景と意義－、10. ゲオルク・フィリップ・テレマンの《マタイ受難曲》(1730)における創意、◇ 研究ノート：1. 日本における中国キリスト教史研究について－日中戦争期を中心に－、2. 地域から安全保障を考える視点－自治体の「平和政策」に着目して－、3. Understanding of the Prophetic in the Critical Thinking of Cornel West、4. 上海浦東新区における対外開放とプロテスタント教会堂の変化－上海市感恩堂のケースから－、◇ 資料紹介：オーバン神学校に学んだ人々

「礼拝・音楽研究 No. 64」

(東京基督教大学 教会音楽アカデミー・2015.3)

- ◇ 特別寄稿：1. 「日本の教会史における賛美の特質」、2. 「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな－ヨハネの黙示録の教会と礼拝－」、◇ 特集：教会音楽講習会 1. 卒業生からの声、2. 講師から、◇ エッセイ：1. 音楽エッセイ、2. God bless you 誕生秘話、◇ 2013年度「公開講座」講義録、◇ 第43回夏期教会音楽講習会



あとがき

日本宣教リサーチが発足して、早や1年が経ちました。ここまで、ご支援くださった方や教団、教会の皆様には、心から感謝致します。

日本宣教ニュースも、第4号の発行となり、当初予定を何とかクリアすることができ安堵しています。内容的にもほぼ形が決まってきた感じがしますが、今回も前号に引き続き、他宗教の情報を掲載しました。

こうした記事から、神道や仏教等既成宗教を取り巻く環境の厳しさと、それに対するそれぞれの危機感を感じとることができます。また遺骨を「ゆうパック」で送る、などの新たな動きも出ています。ある調査では、葬家が葬式をせずに直葬を選ぶ割合は、全国平均で16%、関東圏だと22%にもなるとのことです。その理由としては、「経済的な理由」が圧倒的に多いが、「宗教儀礼に意味を感じていない」などの意見も聞かれたと言われています。

こうした動きを、同じ宗教界に身を置くキリスト教界としては、どのように捉えて考えたらよいのでしょうか。その点、田原総一郎氏のインタビュー記事の言葉は、仏教だけでなくキリスト教界としても重く受け止める必要がある言葉ではないでしょうか。

この度、日本宣教リサーチから同時発行した「JMR調査レポート（2014年度）」によれば、クリスチャン人口は、カトリックだけでなく、プロテスタントでもここ数年大きく減少傾向を示しています。キリスト教界全体としても、相当の危機感を持たなければならない状況にあるように思います。

日本宣教リサーチは、こうした客観的なデータや情報を、今後も発信していくことによって、日本宣教のパラダイム転換に少しでも寄与していければと願っています。

新年度も引き続きご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

「受け身の信仰はみ言葉を真として受け、
少しも動くことなし
働く信仰はわざを始め、これによりて
み言葉の真なるを知る」

(初穂)



日本宣教リサーチ発足1年を迎えて

教会インフォメーションサービス（CIS）の働きを引き継ぎ、日本宣教の基礎的研究を行うことになった日本宣教リサーチ（JMR）は、発足から1周年を迎えることができました。CISの支援者が継続してJMRをご支援下さったこと、新しい支援者も加えられたことを感謝いたします。そして、この働きへの期待の大きさを知り、身の引き締まる思いです。

この20年、日本の教会の様相は大きく変化しました。グローバル化の中で在日外国人教会の増加、在外信徒や求道者の帰国、韓国系教会・単立・インターナショナル教会の増加、聖霊派の影響、都市と地方の格差、教会の統廃合など。その中で、まず教勢データの充実した集積が必要です。宣教協力や新たな宣教方針、地域に根ざす教会の形成や文化脈化の理念の検討が求められている中、JMRが少しでも貢献できればと願っています。

2015年度は、東日本大震災被災地における「震災と信仰」調査プロジェクトを実施します。これは、震災を記録すると共に、これからの日本宣教のあり方を被災地の取り組みから学ぼうとするものです。2年目の日本宣教リサーチにどうぞご期待くださり、更なるご支援をお願いいたします。

【賛助会員】「日本宣教リサーチ」の活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

- (1) 特別賛助会員：趣旨に賛同し、支援して下さる教団・教派、宣教団体等
 - ・一口 30,000 円（何口でも）
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催をご案内します。
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」を提供します。
 - ・毎年 1 回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート（詳細篇）を提供します。
- (2) 一般賛助会員：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等
 - ・一口 2,000 円（何口でも）
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催をご案内します。
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」を提供します。
 - ・毎年1回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート（概要編）を提供します

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

TCU への寄付金（献金）は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金（献金）額の約 50% となります。

（詳しくは、☎0476-46-1131「TCI 募金係」までお尋ねください）。

郵便振替口座：00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

* お振込みの際には、本学発行の振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。（振替用紙がお手元にはない場合はこちらよりお送りいたします。）



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ
【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5

学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内
TEL：0476-31-5522 FAX：0476-31-5521 E-mail：jmr@tci.ac.jp
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一（東京基督教大学大学院神学研究科委員長）
日本宣教リサーチ専門委員 柴田 初男、花蘭 征夫